

---

# 風の魔法使い

まるさん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

風の魔法使い

### 【Nコード】

N7510X

### 【作者名】

まるさん

### 【あらすじ】

海鳴市に住まう少年、テンマミカセ天馬御風にはある秘密があった。

風の中にある魔力を組み替え、新たな風を、そして翼を生み出す力『マテリアルバズル魔法』。

その力を周囲に隠していた御風は、ある夜見たこともない異形に襲われるとともに、もう一つの『魔法』に出会う。

魔法と魔法がぶつかり合い、少年の否応なしの冒険が今始まる！

## 滅びた後のプロローグ（前書き）

初投稿です。至らぬ点は多々あるでしょうが、なるべく温かい目で見てやってください。

## 滅びた後のプロローグ

次元の海に無限の泡沫のごとく浮かぶ世界。

起こっては滅ぶそれらの世界は、時として様々な存在を後に残す。

それは人であったり物であったりするのだが、その中でも特に強力な力を持つ物を、次元のほんの一部に手をかけるある組織は「ロス・トロギア」と呼んでいる。

ではそれが、形のない、そう「世界の記憶」とも言うべき物ならば、彼らはそれを何と呼ぶのだろうか。

一つの世界があつた。

大地と共に命が溢れ、文明と共に人が生活する、そこだけ見れば当たり前前の世界。

だが、その世界は唐突に滅びた。

全てが無に帰した今では、その世界に何が起こったのか知る者は誰もいない。

虚しく散逸していくその世界は、形ある物を一切残してはいかなかつたのだから。

ゆえに、金色の輝きに包まれた一片の羽が「世界の記憶」のひとつかきを宿し、虚空の海に消えていった事も、誰にも知られる事はなかった。

ある病院の一室は、喜びが満ちていた。

ベッドに横たわる女は、少し疲労した様子であったが幸せそうに。

その傍らにの椅子に腰掛けた男もとても嬉しそうな様子で。

両者の視線が向かう先には、男の腕の中に抱かれた、一人の赤ん坊の姿があった。

つい数時間ほど前に生まれたばかりの、二人の愛の結晶である。

「それにしても病院から連絡を受けたときはびっくりしたよ」

予定していた日よりも10日も早くの出産であったためどうなる事かと思っていた男だが、母子ともに健康との医者のお墨付きを受けて大きく安堵していた。

「当事者だった私が一番驚いたわ。でも、何となく予感はしてたの」「どうしてだい？」

苦笑しつつ言った妻の言葉に夫である男は首をかしげた。

「この子が生まれる前の日に夢を見たの」

「夢？」

「そう。眠っている私の上にね、空から金色の羽が一枚落ちて来るの。その羽が私のお腹の中に吸い込まれると同時に、とても温かくて、そして柔らかな風が吹いたの。その後眼が覚めたら何だかお腹がじんわりとしててね、ああ、これは今日あたり生まれるのかなって思った」

「ふ〜ん」

母ともなればそのような暗示的な夢も見るとかと、男は感心したように頷いた。

「ねえ、あなた。この子の名前、もう決めた？」

「いや、まだだよ。もう少し先だと思ってたから、ギリギリまで考えてみるつもりだったからね」

夫の言葉に、女は少し安堵したように笑った。

「じゃあ、私がつけてもいい？あの夢を見たときから、ずっと考えてた名前があるのよ」

そう言いつつ身を起こした女の動きから察した男は、腕の中の赤ん坊を妻に渡しながら尋ねた。

「どんな名前？」

受け取った赤ん坊をあやしむながら、女は嬉しそうに答える。

「あのととき感じた温かな風。その風に祝福された子、そしてそんな風のようにやさしくなるような願いを込めて、御風<sup>ミカゼ</sup>。そう名付けたいの」

「御風、御風か……。うん、いいね」

妻のつけた名前を口の中で転がしていた男は、大きく頷いて賛成の意を表した。

「よし、決まりだ。この子は御風、天馬御風<sup>テンマミカゼ</sup>だ」

夫の言葉を満面の笑みと共に受け取った女は、己が胸中の赤ん坊御風の頬を指で軽くくすぐった。

「これからよろしくね、御風」

赤ん坊はその慈愛のこもった言葉に何を感じるでもなく、ただその小さな口を開けて一つ、欠伸をした。

## 滅びた後のプロローグ（後書き）

本編が始まる前に一つ言っておきます。

この小説内におきましては、マテパの世界は既に滅んでいるという設定になっております。

ファンの方々、申し訳ありません。

## 少年と翼（前書き）

随所にマテパっぽさが出ていれば幸いです。



## 少年と翼

遮光カーテンに遮られ、薄闇漂う部屋。

目を凝らせば、教科書や辞書の詰め込まれた勉強机や漫画の並んだ本棚といった、いかにも子供らしい有り様の内装が見える。

そんな部屋の窓際、子供サイズのベッドに一人の少年が眠っている。年の頃は9〜10歳ほど。顔立ちこそそれなりに整ってはいるものの、それ以外はごく普通の小学生といった様子の少年である。

「…ぜ。…かぜっ。…御風っ！」

どこからか自分を呼ぶ声がある。

その声に導かれるように、少年 御風<sup>ミカゼ</sup>はゆっくり覚醒した。

枕元にある目覚まし時計に手を伸ばせば、そこに表示されている時刻は「午前2時」。

「…空耳…、じゃなきやお化け…」

ポーンとした声でむにゃむにゃと呟いた御風は、時計を放り出して再び夢の世界へ旅立った。

それから10分後、何者かが走り込んで来る足音と共に御風の部屋の扉がぱあんつと勢いよく開かれた。

「御風っ！いつまで寝てるの！？遅刻するわよ！」

部屋に乗り込んできたのは御風の母であった。

「御風！早く起きなきや、本当に遅刻するわよ！」

布団を引っぺがしながらの母の言葉に、御風は寝ぼけ眼を擦りながらもぞもぞと起きあがった。

「…まだ夜中の2時だよ？こんな時間に学校行く奴なんかいないよ…」

大きく欠伸をしながらのたまう御風に、母は遮光カーテンに手をかけ、それをしゃつと払った。

途端、午前2時にはあり得ない強い日の光が御風の目を焼いた。

「うおっ、まぶしっ！？」

思わぬ刺激に目を押さえる御風に、母は呆れたように嘆息した。

「いい天気ねえ。こんなお日様の出ている時間のどこが夜中の2時なのかしら？」

その言葉によくやく意識のはっきりした御風は、先程放り投げた時計ではなく携帯電話を手に取り、恐る恐るそれを開いた。

次の瞬間、驚愕と恐慌に塗れた悲鳴が御風の喉から迸った。

「いつてきますっ！」

その後、洗顔、歯磨き、朝食をわずか15分で済ませた御風は、己の通う私立聖祥大附属小学校の制服に身を包み、家を飛び出していた（因みに、件の目覚まし時計は電池切れであつたらしい）。

車に気を付けるのよー、という母の言葉を背に走る御風は、本気で焦っていた。

このままではどう頑張ってもバスの時間に間に合わない。

現在の時刻、バス停から今いる位置までの距離、己が体力、様々な条件から導き出したそれが御風の結論であつた。

これが普通の人間ならば諦めて先生に怒られる覚悟を固めるところであるが、御風にはまだ何とかできる手段があつた。

御風は不意に立ち止まると、あたりをきよるきよると見回し、人影がないことを確認した。そして、遅刻寸前だというのに人気のない路地裏にその身を滑り込ませた。

そこでも尚辺りを見回し、誰かいないかを確認する。いやに念のいっただ仕草である。

右を見て左を見て、上に視線を滑らせた時、御風は塀の上に一匹の猫がいることに気がついた。

妙に丸っこい体の、すごく緩い顔をしたその猫はこの距離まで近づいてもまだ逃げようとしない。

しばしその猫と見つめ合っていた御風だが、

「まあ、お前ならいいか…」  
と、猫のことをスル　した。

猫以外に周囲に何物も居ないことを改めて確認した御風は、己の中に眠る【力】を解き放つ。

マテリアル・バズル  
「魔法・エンゼルフェザー！」

その名と共に立ち上がった御風の魔力が、周囲の風を取り込み始めた。

御風の背中に巻き起こった風は、かちやかちやと何かを組み上げるような音と共にその形を変えていく。

数秒後、御風の背には光で構成されたかのような一対の白色に輝く翼が生えていた。

これが御風に秘められた力、マテリアル・バズル【魔法】、その中でも風を操り、翼を生み出す【エンゼルフェザー】である。

幼い頃から、御風の目にはいつも不思議なもの映っていた。

風の中に舞う、光の粒。自身の体から立ち上るもやのようなもの。

ある時、御風は母にこれは何なのだと尋ねたことがあった。

しかし、母はその両者共見えることはなかった。それはほかの者、父であったり、友達であったりも同様であった。

ここにきて御風は、これらの現象は自分にしか認識できないものであるということを理解した。

次に御風がしたことは、それに触れてみるということであった。だが、ただ触るだけでは光の粒ももやのようなものも空しくすり抜けるだけであった。

考えた御風は、この二つが同じようなものであると仮定して、もやをまとったまま光の粒に触れてみた。

すると、光の粒は吸い込まれるようにもやと混じり合い、かちやかちやと音を立てその姿を変えていったのである。

これに驚いた御風は手の中で形を変えるそれを近くにあった石ころに擦り付けて消そうとした。

それが功を奏したのか、手の中のそれは果たして石に移り、数秒後、その石を包み込むように羽となって顕れた。

その有様を見た瞬間、御風の中に唐突のそのの正体が浮かび上がってきた。

「マテリアル… パズル…」

マテリアル・パズル あらゆる存在に宿る【魔力】マテリアル・パワーをパズルのように分解／再構築することで別のエネルギーを作り出し、この世に新たな法則を生み出す力。これを【マテリアル・パズル】と呼び、【マテリアル・パズル】を操る者を【魔法使い】と呼ぶ。

なぜそのような知識が己の中にあるのか、当時の御風は全く疑問に思わなかった。そのことは、自分にとってごく当たり前のようになぜか思えたからである。

【魔法】マテリアル・パズルを知った御風は、最後にこの力をどうするかを考えた。

本音を言えば、両親や友達に自慢したい気持ちもあった。しかし、その当時の年齢にしては聡明（漫画や、母に読み聞かせてもらった童話などの知識）であった御風は、このような力を不用意に見せなければ、周囲に恐れられてしまうのではと思った。

大好きな両親や仲のいい友達からそんな態度を取られたらと考えただけで、御風は血の冷えるような気持ちになった。

故に御風がこの力を周りから隠し通そうという結論に至ったのは、当然の流れであった。

それでも、まあ、隠れてこっそりと練習し、力の把握に努めたりもしたのだが。

そして現在、御風は己の【魔法】を完全にものにしていて。

己の生み出した羽を二、三度羽ばたかせた御風は、その構成に何の

問題もないことを確認していた。

使い始めたばかりの頃は、十分な魔力を込められていなかったのか、羽がいきなり飛び散ったりと危ない目にもあったのである。

余談であるが、別に魔法は呪文のようにその名前を呼ぶ必要はない。ただ、御風の場合ちゃんと口に出したほうが【魔法】の構成がしっかりする気がするのでそうしているだけである。

「よし、行くぞおっ！」

気合い一発、御風は大きく跳躍すると同時に背中の羽を羽ばたかせる。ばさりばさりと音を立てる翼は、御風の体をあっという間に空へ舞いあげた。

その様子を、ただ猫だけが相変わらずの緩い顔で見送っていた。猫を後にした御風は、一直線にバス停の方角へ飛んだ。それなりに高い位置で飛んでいるせいか、誰かに見つかるようなことはない。よしんば見つかったところで、人間が飛んでいるなどと思わないであろう者ならば、大きめの鳥か何かだと勘違いしてくれるはずである。

御風は空を飛ぶのが好きだ。重力の頸木を離れて舞うこの感覚は、正に自由そのものである。

このままずっと飛んでいたい気分ではあるがそうもいかない。御風はバス停を視認すると同時にその近くにある公園に降り立った。もちろん、周囲に誰も居ないことは確認済みである。ここからならば、バス停まで歩いてほんの数分で着く。携帯電話の時刻を確認した御風は、まだ時間に余裕があることを知り、ほっと一息ついた。

しばらくのち、何食わぬ顔でバスに乗り込んだ御風は、今日は一体何をして遊ぼうか、と小学生らしい思考に没頭した。

この世界にただ一人の【魔法使い】、天馬御風の何気ない日常は、こうして今日も平和に幕を開ける。

## 少年と翼（後書き）

本編開幕です。

タイトルなどから分かって下さる方もいらしたでしょうが、主人公「御風」の使う【魔法】は【エンゼルフェザー】となりました。

御風少年の容姿に関してですが、ゼロクロイツのベルジを幼くしたものを想像していただけるとわかりやすいです。

次回はついに御風が異世界の【魔法】と出会います。当然どこぞのフェレットと幼き白い魔王様も登場します。

**【魔法】と【魔法】（前書き）**

無印開始です。

## 【魔法】と【魔法】

夜。

一日を無事に過ごした御風は、自室の勉強机にて宿題に挑んでいた。時折悩みながらカリカリと手を進めるその姿は、風と翼を操る【魔法使い】と思えぬ、いかにも小学生らしいものであった。

「…ん？」

シャープペンシルの中身を交換しようとした御風は、筆箱の中にある芯のケースが空であることに気付いた。

「どうするかね」

別に鉛筆が無い訳でもないし、もう少しで宿題も終わる。だが、御風はこれを口実に夜の街を散歩してみたい気になった。

いつもど通りの一日の締めめに、本の少し刺激が欲しくなったのである。

思い立てば吉日。御風は上着を手にすると、母に外出と目的を告げた。

「大丈夫？もう、真っ暗よ？」

心配そうに言う母に、御風は笑って首を振る。

「大丈夫だって。コンビニはすぐそこだし、なるべく明るい場所を通って行くしね」

（それにいざとなれば【魔法】もあるし）

胸中でこっそりそう呟いた御風は、いまだ渋る母を置いて、夜の海鳴へ繰り出した。

「あじゃじゃしたー」

おぎなり極まりないバイト店員の声を背に、御風はコンビニを出た。その手の袋の中にはシャープペンシルの芯以外に、アイスの袋が3



つ（自分・父・母の分）が入っている。

「ま、こんなもんだろうねー…」

当然ながら、道中特に目立ったことはなく、御風はほんの少しがっかりした気分をため息とともに吐き出した。

市街地ならともかく、閑静な住宅街であるこのあたりには、こんな遅い時間帯を歩いているような人影は御風以外にいない。

取り残されたかのような静けさの中、御風は天を仰ぎ見ながら思い耽っていた。

当たり前の日常。

これからも続いていくであろう平和な日々。

そのことに不満はない。ただ。

「なーんか、退屈。なんだよなあ…」

退屈を吹き飛ばす非日常はココにある。しかし、それを人に晒すことはできない。

己に課した枷が蝕むジレンマは、少年にほんの少しだけ、訳もわからぬ焦燥感を与えていた。

そんなうっ屈した思いを意地悪な神が叶えてくれたのか、御風の人生を揺るがす福音の鐘が、鈍い轟音という形を取って響き渡った。

…ごおんっ…。

「…なんだ？」

静寂の元、やけに大きく聞こえたその音に御風は思わず足を止めた。

（あつちには確か、動物病院ぐらいしか目立った建物は無いはずなんだが）

己の境遇に僅かな不満を抱きつつあった御風が、何かありうるであろうそちらの方向に足を向けたのは無理からぬことであった。

（行ってみよう）

そう思っつて、御風は音のした方へ歩き出した。

高町なのはは走っていた。今まで生きてきた中でも、一番頑張って走っていたかもしれない。

それはそうだろう、なのはの背後には「黒いナニカ」としか表現できないものが迫って来ているのだから。

「何！？何なの！？あの化け物！？あれは一体何なの！？」

なのはは息を切らせながら、己の腕の中にいるフェレットに尋ねた。このフェレットは、なのはが今日の夕刻に傷だらけで倒れていたの助けたものである。

その夜、なのはは突如頭の中に響いた助けを求める声に従ってこっそりと家を抜け出し、声のする方向に走って行った。

声の発信源に到着すると、そこはフェレットを預けた動物病院があった所だった。なぜ過去形なのかというと、そこに在るべき病院は廃墟と呼ぶにふさわしい瓦礫の山になっていたからだ。

「…一体何が起きているの？」

茫然と辺りを見回していたなのはは、そこに昏間助けたフェレットが倒れているのを見た。

慌ててフェレットの傍まで近づき、抱きかかえると、

「…ありがとうございます。来てくれたんだね…」

突然フェレットが話し始めた。

そのことに驚くなのはだったが、追い打ちをかけるように廃墟と化した病院の壁がいきなり砕け散り、中から「黒いナニカ」が現れた。そして、今に至る。

「僕の名前はユーノ・スクライア。いきなりで申し訳ない。でも貴女には資質が有る。お願いです、力を貸して下さい！」

なのはの質問には答えず、フェレット ユーノは言葉を紡ぐ。

「し、資質って？」

「僕はある探し物の為に、ここではない世界から来たんです。でも、この探し物は僕一人の力では、想いを遂げられないかもしれない」

ユーノの真剣な口調に、なのはは足を動かしながら黙って話を聞く。「お礼はします。必ずします。ですから、僕の持っている力を、」

魔法】の力を、貴女に使って欲しいんです！」

「【魔法】？きゃあっ!？」

どかつ!。

聴き慣れぬ単語に思わず聞き返した瞬間、なのはは角を曲がってきた何者かと派手にぶつかり思いきり尻餅をついた。

「いったあゝ…!」

思わず涙目になるのはだが、それでもユーノ落とさなかったのは見上げたものである。

一方、ぶつかられた方も吹き飛ばされた拍子にどこか打ったのか、その場に蹲り苦悶の声を上げていた。どうやら、自分と同じくらいの年頃の少年の様である。

「ご、ごめんなさいっ。…って、に、逃げて…!!」

少年を助け起こそうとしたその時、なのはは己の置かれていた状況を思い出し、焦燥に満ちた声を上げた。

どかつ!。

音のする方へ向かっていた御風は、角を曲がった瞬間猛然と走ってきた何者かに体当たりでわき腹を痛打されて吹き飛んだ。

「んぐおおおお…!!」

不意の衝撃に肺の中の空気は吐き出され、御風は軽い呼吸困難に見舞われながら凄まじく痛むわき腹を押さえて蹲った。

「ご、ごめんなさいっ。…って、に、逃げてー!」

その焦りまくった声に顔を上げると、そこには何か小動物を抱えた御風と同じ年くらいの少女が立っていた。

栗色の髪をツインテールにした、なかなかの美少女である。

だが、御風はそんな少女の可愛らしい容姿を把握する前に、その背後に迫る「黒いナニカ」に目が釘付けになった。

「な、なんじゃありゃーっ!？」

どごそのジーパン刑事の真つ青な声量で叫んだ御風は、慌てて起きあがって目の前にいる少女の手を取って逃げ出した。

「うひゃあつ！？じ、自分で走ります！大丈夫ですからー！」

いきなり引つ張られて驚いたのだらう、少女はつんのめり掛けた体のバランスを取って走り始めた。

少女から手を離れた御風は、背後に迫る驚異の正体を少女に尋ねた。  
「ありや、一体なんだ！？新種の生物か！？どこかの研究所から逃げ出した実験体か！？」

「そ、それを今から聞く所だったの！」

並走する少女は息も切れ切れに答えてくれた。

「聞くつて…、誰に！？」

「え、えーと、この子に…」

そう言つて少女が差し出したのは、その腕の中にいた小動物。

「は、はじめまして…」

絶句した御風の鼻先で、件の小動物が片手を挙げて挨拶してきた。

「…なんじゃそりゃーっ！？」

御風の声が再びあたりに響き渡った。

「と、とにかく！貴女の力を貸してください！」

フェレットが混乱に満ちた場を制するかのような大きな声で叫ぶ。

「そ、その【魔法】の力があれば、あれを何とかできるの？」

「【魔法】？」

御風にとつて決して無視できない単語に、思わず聞き返した。

「あんだ、【魔法】が使えるのか？」

「え、いや、その…」

思わず鋭くなつた御風の言葉に、少女は口ごもってしまった。

「この人はまだ【魔法】は使えません。僕がこれからその術を渡します」

少女を慮つてか、小動物の方が答えてきた。

（今は使えねえつてのはどういうことだ？俺の使う【魔法】とは違マテリアル・パスルうのか？）

困惑するする御風を余所に、少女と小動物の話は進んでいく。

「わかった。じゃあ私は何をすればいいの？」

「これを！」

小動物は首に掛けられていた赤いビー玉を、少女に見せるように掲げる。

「何か温かい……。これは？」

「インテリジェントデバイス。魔法を使うための杖です」

「これが……？」

杖と言われても、それはただの赤いビー玉にしか見えない。

「今は待機モードの状態なんです。ですから、貴女の力で目覚めさせて下さい」

「え、どうやって？」

そこまで着た瞬間、御風は後方の化け物が大きく跳躍するのを感じた。

「おいつ！来るぞ！！」

「えっ！？」

跳躍した化け物はそのまま御風と少女を飛び越え、その眼前に躍り出た。

「ちっ……。回り込まれたか……」

「ど、どうしよう」

苦々しく顔を歪める御風の横で、少女がおろおろとろたえている。

「おい、その小動物」

「へ？ぼ、僕ですか？」

「いや、他にいねえだろ」

御風は眼前の化け物から目を離さず、

「お前とこの子がなにかすりゃ、この化け物をどうにかできるんだな？」

「は、はい……。でも……」

そのような時間を目の前に化け物が与えてくれるだろうか？爛々と好戦的に輝く赤い両眼を見る限り、望みは薄そうだ。

「…わかった。その時間、おれが稼いでやる」

「ええっ!？」

「無茶ですっ!ただの人間があれをどうにかしようなんて!」

驚きの声を上げる少女と慌てて止める小動物。両者を尻目に、御風は己の【魔法】を開放する。

「何、心配するなよ。こっちもただの人間のつもりはねえよ」

立ち上る魔力が周囲の風を取り込み、かちやかちやと音を立てて御風の背中に集まり始める。

マテリアル・バズル  
「【魔法】、エンゼルフェザー!」

高らかに紡がれる名前と共に、御風の背中に一对の光輝く翼が出現する。

「なっ!？」

驚愕に固まる小動物。そしてその横でやはり驚きに眼を見開く少女の口から思わず言葉が漏れた。

「…天使?」

「いや、違うな」

その魂が抜けたかのような声に、御風は不敵な笑みで応えた。

「俺は、【魔法使い】だ!」

**【魔法】と【魔法】（後書き）**

なのはとの初邂逅の話でした。  
本格的な戦闘はまた次回。

## 風の翼と不屈の勇氣（前書き）

御風にとって初の戦闘ですが、いろんな技を修行で開発しています。



## 風の翼と不屈の勇氣

ユーノ・スクライアは目の前で起こった状況に驚愕していた。成り行きで刹那の行動を共にした少年には、魔力の源である「リンカーコア」は存在していなかったはずである。

にも拘らず、少年は魔力を操り、見たこともない魔法を行使している。

（この世界独自の魔法！？それにしてもデバイスはおろかりンカーコアも知らない魔法なんて聞いたこともないぞ！？）

刻々と変化してゆく事態に比例するかのようになり、ユーノの混乱もその度合いを深めていった。

高町なのはは目の前の少年に目を奪われていた。

その背中に輝く純白の羽。その姿に思わずこぼれ出た言葉を不敵に笑って否定した少年は、己を【魔法使い】と嘯いた。

平凡な小学生だったはずの自分に、突如巻き起こった異常な事態。刻々と変化してゆく事態を、今現在のなのはは目を逸らさずにいることしかできなかつた。

後ろの一人と一匹が茫然としているのが御風にはわかつた。

まあ黒い怪物に続いて、偶然出会った少年の背中から羽が生えれば、そうなるのも無理はないだろう。

だが目の前の状況が状況である。いつまでも両者を呆けさせておくつもりは御風にはなかつた。

「何ポーっとしてんだ！なにかするなら早くしろ！」

御風の叱咤の声に、少女と小動物はようやく我に帰ったようである。慌てて両者が先程の続きを始めるのを尻目に、御風は怪物に向き直った。

「わりいな。少し相手して貰うぜ」

黒い怪物は、不敵な表情でそう言い放った、目の前の生意気な子供を喰りと共に睨みつけた。

しかし、当の子どもに怯えた様子はない。

その巨体に溢れる凶暴な性質を大いに刺激された怪物は、雄叫びを上げて少年に躍りかかった。

「甘い」

しかし、哀れな犠牲者を押し潰さんとしたその巨体は、御風の目の前にぎやるんっ！と巻き起こった強風の壁に遮られ届くことはなかった。

風の壁を破らんと圧力をかける怪物だが、逆のその体が巻き起こる風に押されじりじりと後退していく。

「せー、のっ！」

御風の気合いの声と共にさらに勢いを上げた旋風が、怪物の体を弾き飛ばした。

地響きを立てて落下した怪物だが、すぐに何事もなかったかのように起きあがり、牙をむき出して御風を威嚇した。

「生半可な攻撃じゃびくともしない、か」

ノーダメージな怪物の様子に、御風は眉をしかめた。

どうするかと思案する御風の目に、何やらぐつと力を込める怪物の様子が映った。

何を、と思う間もなく、次の瞬間、怪物の体から無数の触手がびゅうつと空気を切り裂き、矢のように御風に向かって迸った。

「うおおっ！？」

思わぬ反撃に、御風はとっさに背中の中を翼を羽ばたかせ、空中へ逃れた。

だが、触手はその御風を追って空へと伸びる。その姿はまるで蛇の様である。

「なめんなっ！」

御風は周囲の風を瞬時に変換、鋭利なかまいたちを生み出して触手

の群れを切り払った。

「体当たりだけが能じゃないのか」

見下ろす御風と、見上げる怪物。御風の目にはこちらを見る怪物の視線に嘲弄が混じったように感じた。

「…上等！」

御風はぴきりと額に青筋を浮かべると、己の掌に風を集め始めた。唸りを上げる豪風が、どんとと勢いよく圧縮されてゆき、やがてそれは光の球とも見紛うべき物へ変化した。

「ほらよ」

御風はその風の塊を無造作に怪物に向かって放り投げた。

勢いも何もない、見た目はただの球であるそれに何の脅威も感じなかったのか、怪物は避ける素振りもせずそれを受け、

どごんっ！！

突如発生した凄まじい負荷に、怪物はその巨体を地面にめり込ませた。

「メテリアル・バズル【魔法】エンゼルフェザー、シザンメン・トリュッケン『大圧縮球』」

ずぶりずぶりと怪物の不定形の体にめり込んでいく球を見届けていた御風は、それが完全に埋没したのを見計らい、己の魔法を解除した。

次の瞬間、

ばおおおおおおおっ！！！！！！！！

体内で解放された風が暴発し、怪物の体がその巨体の数倍以上に膨張した。内部で荒れ狂う風に体を破裂させまいと、怪物は必死に己の体の維持に努める。

「頑張つてんな。でも、幕だ」

御風は指をピンッと弾くとその先から先程の物とは比べるべくもない、小さなかまいたちを怪物に放った。

それが怪物の体を僅かに切り裂いた刹那、

どごおおおおおおおんっ！！！！！！！！！！！！！！！！

爆弾でも爆発したかのような轟音と共に、怪物の体は割れた風船の

ごとく散り散りに爆ぜた。

後に残ったのは、怪物の核なのか青く輝く小さな石だけである。

「（あの石、とんでもない魔力を感じる。）…って、おい、うそだろ？」

御風は己の目を疑った。驚くべきことに、粉々に散ったはずの怪物の黒い肉片が、青い石を指して集まり始めたのである。

（このまま放つて置いたら確実に復活するな。どうする？あの石をぶっ壊してみるか！？）

その時、思わぬ事態に悩む御風の背後で、桃色の光の柱が立ち上がった。

「な、何だあ！？」

驚いて振り向いた御風の目に飛び込んできたのは、自分の通う小学校の女子の制服によく似た服をまとい、長い杖を持った栗色の髪の少女であった。

それを見た御風の口から、先程の少女のように思わず言葉が漏れた。

「…魔法少女？」

「そ、そうみたいなの…」

御風の言葉を聞きつけた少女は己の姿に困惑しながらコクコクと頷いた。

怪物を少年に任せたユーノとなのはは、渡されたデバイス　レイ  
ジングハートを起動させようとしていた。

「目を閉じて、心を澄ませて、僕の後に続いて唱えてください」

「あ、うん」

ユーノに促され、なのはは目を閉じる。

「我、使命を受けし者なり」

「…わ、我、使命を受けし者なり」

少しどもりながらも、なのはは答える。

「契約の下、その力を解き放て」

「契約の下、その力を解き放て」

ドクン、と手に持つ赤い宝玉が、脈打ったかのようになのは感じた。

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

唱えていると、手の中の宝玉はドンドンと熱を帯びていく。

火傷しそうな熱さを感じながらも、なのははそれを手放すことができなかつた。

何故ならば、それと同時に、手の中の熱と同種の熱が、身体の奥底から湧き上がるのを感じたからである。

「そして、不屈の心は」

いつの間にか、なのははユーノの言葉に追いついていた。

聞かずとも、自然と、何を言えばいいのかが分かる。抑えられぬ衝動のまま、なのはは詠唱の最後を口にした。

「この胸に！！」

「この手に魔法を！レイジングハート！セットアップ！！」

『スタンバイ・レディ、セットアップ』

唱え終わると同時に、柔らかな女性の声が宝玉から響く。そして桃色の光が天へ向かって迸った。

その様はまるで光の柱のように見えた。

「凄い……。なんて魔力だ……」

ユーノは予想以上のなのはの魔力に驚いていた。そしてなのはは自分の様子に焦る。

「えっ！？こ、これ、どうすればいいの！？」

その言葉にユーノはハツとして、なのはに声を掛ける。

「落ち着いて下さい！ それは貴女の魔力です。落ち着いて、イメージして下さい」

「イメージって何を！？」

自分の身体に起こる異変のせいで、なのははもういっぱいいっぱい

であった。

「貴女の魔法を制御する、魔法の杖の姿を。そして、貴女の身を守る、強い衣服の姿を！」

「つ、強い衣服って…」

「なんでもいいんです！後で変更出来ますから！貴女が馴染みのある格好で構いませんから！」

「そんな、急に言われても…。えっと、えっと…」

その時、なのはの脳裏にいつも自分が来ている小学校の制服が浮かんだ。

「と、とりあえずこれで！」

なのはがそう言った瞬間、手の中の宝玉が輝く。

なのはの身体が光に包まれ、次の瞬間には姿が変わっていた。

所々意匠は変わっているが、白と青で構成された、胸元の赤いリボントイがチャームポイントの己の小学校の制服に酷似した服へと。

そして手にしていた赤い宝玉は、桜色の柄の先端に金色のパーツ、そしてそこに宝玉が納まるという長い杖へと。

「な、何なのこれ〜!?!」

杖 レイジングハートを手にしたなのはが、自分の姿に驚きの声を上げた瞬間、先程まで怪物と戦っていた少年がいつの間にかこちらを振り返り、なのはとぼつちり目が合ってしまった。

「…魔法少女？」

ぼろりと漏れた言葉に、

「そ、そうみたいなの…」

今だ事態を把握できないなのはは、

(やっぱりそう見えるよね…)

とその部分だけ把握して頷いていた。

しばし間抜けた感じで見つめ合うのはと少年。だが、ユーノはそ

んな状況をとりあえず置いておいて、

「彼のおかげ今ジュエルシードは剥き出しの状態です。今の内に封印を！」

いまだ宙に浮かんで青く輝く石を指し、なのはを促した。

「ふ、封印！？つて、どうすればいいの！？」

「さつきみたいに、心を澄ませてください。心の中に、あなたの呪文が浮かぶはずですよ！」

「う、うん……」

なのはは再び目を閉じた。周囲の音が消え、心の中へ深く潜っていくような、そんな不思議な感覚をなのはは覚えた。

そして、なのはの心に言葉が浮かび上がる。

それに導かれるまま、なのはは杖を青い石に向けた。

「リリカル・マジカル！封印すべきは忌まわしき器、ジュエル・シード！」

杖の先端が桜色に輝く。

「ジュエル・シード封印！」

『シーリングモードセットアップ』

杖から現れた、幾筋もの光が青い石に絡みつく。

『スタン・バイ・レディ』

「リリカル・マジカル…ジュエル・シード・シリアル21、封印！」

『封印！』

杖から更に溢れた光がジュエルシードを包み込む。その途端、ジュエルシードから放出されていた凄まじい魔力が一気に霧散する。

「レイジングハートでジュエルシードに触れて下さい」

ユーノの声に従って、なのはレイジングハートの先端でジュエルシードに触れる。

すると、ジュエルシードは音もなくレイジングハートの宝玉部に吸い込まれていった。

『シリアルNo.21封印完了』

レイジングハートがそう告げた瞬間、なのはは元着ていた服に戻り、

レイジングハートも最初の赤い宝玉の形態に戻った。

「これで……おわったの？」

「うん……ありがとう」

ユーノが弱弱しく礼を告げる。どうやら、体力、気力的に底値にいららしい。

「それが、お前らの【魔法】か……。俺以外でそんな見たの、生まれて初めてだぜ」

「「あ……」」

その声に、なのはとユーノはようやく少年の事を思い出した。

興味深げにこちらを見る少年。

未知の魔法の使い手に、わずかな警戒心と困惑を見せるユーノ。そしてなのはは、今だ終わらぬ夜に、本の少しため息をついた。



## 風の翼と不屈の勇氣（後書き）

疾走感のある戦闘シーンが書きたかったのに：orz。

何かやたらと擬音の多い戦闘になってしまった。

今回御風が使った、『ツザンメン・ドリユッケン大圧縮球』はマテパのリユシカが使った『ク  
リームパン』と同種の魔法です。多少の違いはありますが。

次回はようやくそれぞれが自己紹介します。

## 自己紹介と夢の樹の残滓（前書き）

前回、暴走体一号を少し強めに書いてみましたがどうだったでしょうか？

他のリリカルSS内ではほんの2、3行でやられてしまう彼が不憫なだけだったんです。

## 自己紹介と夢の樹の残滓

破壊の痕跡の残る場で見つめ合う三人。

一人は少年、天馬御風。

一人は少女、高町なのは。

そして最後のひと…、もとい、一匹、ユーノ・スクライア。

【魔法】という特殊な事情に関わる三名は、それぞれがその素性を知らぬ故、何を話してよいものかと、微妙な緊張感と気まずさを含んだ空間を形成していた。

「あの…、先程はありがとうございました」

それを破って最初に口を開いたのはユーノ・スクライアであった。

彼はその小さな頭をびよこんと下げ、御風に礼を述べてきた。

「もしあなたの助力が無ければ、こつも簡単にジュエルシードを封印する事はできなかつたはずです」

「あ、いや、それは別にいいよ。俺もやばい状況だったし。それよりもちよつと聞きたいんだけど…」

まつすぐな感謝の言葉が照れくさかったのか、少しぶつきらぼうな態度をとる御風だったが、すぐに目の前の小動物に聞きたかった事があるのを思い出し問うてみた。

「？はい、なんでしよう？」

「え〜つと、その姿はフェレット、かな？何でフェレットが喋ってんだ？」

「あ、それ私も聞きたい」

それまで口を挟めなかったなのはが手を上げて自己主張した。

「あれ？あなたと会った時って、僕もうこの姿でしたか？」

ユーノはなのはを振り返り首を傾げた。

「うん、そうだよ。傷だらけで倒れてたところを、私と友達三人で助けたの」

「そういえば、あの時わざわざ病院にまで連れていつてくれて、あ

りがとうございました。おかげで、残った魔力で傷の治療に専念することができました」

今度はなのはに頭を下げるユーノ。その姿を内心でかわいい、と思いつつ、なのははいいよいよと手を振った。

「話が先に進まねえ。それより、どっかに移動しねえか？ここに長居するのはまずい気がするんだけど」

「え」

御風の言葉に、なのはとユーノは辺りを見回す。

怪物が暴れ回った跡、御風の魔法で傷ついたところなど、誰かに見られたら下手な言い訳ができない光景が目の前に広がっていた

「ど、どうしよう！」

「いや、逃げるしかねえだろ。俺は物を直す魔法なんて使えねえ」

そっちは？と目で促した御風に、なのはとユーノは揃って首を横に振る。

「ならとつととずらからう」

御風は二人にそう告げると、背中を向けてその場から逃げ出した。

そんな御風の背中におろしていたなのはの耳に、遠くから聞こえるパトカーや消防車等のサイレンが届いた。

「と、とりあえず、ごめんなさ〜い！」

誰に謝っているのか、なのはは少し泣きそうになりながらユーノを抱えて御風の後を追った。

その場を離れた御風達は、少し離れたところにある公園のベンチに腰をおろしていた。

息を整えていた御風は、二人が落ち着いてきた頃を見計らって、

「それで、さっきの続き何だが」

「その前に、自己紹介しない？私たち、お互いの名前も知らないんだよ？」

確かに、この中でかろうじてなのはがユーノの名前を知っているが、御風の名前は知らない。

御風も二人の名前など知らない。

ユーノも、自身は名乗った割には、なのはの名前は知らないし、当然御風の事も知らない。

「じゃあ、俺から。俺は御風、天馬御風だ」

御風が名乗るとなのはも笑顔で自己紹介する。

「私、高町なのは。なのはでいいよ」

「なら、俺も御風でいい。んで、最後が…」

御風がちろりとフェレットに目をやると、

「僕はユーノ・スクライアといいます。スクライアは部族名だから、

ユーノが名前です。それで、先程の質問なんですが…」

「あー…、それ何だが、たぶん長くなるよな？」

御風の質問に答えようとしたユーノを、御風自身が手で制した。

「あ、はい。僕の事情もそうですけど、あなたの事も聞きたいんで…」

ユーノは御風の使う【魔法】マテリアル・バズルの正体を知りたいと思っていた。

リンカーコアを用いない魔法というのは、ユーノの知的好奇心を大いに刺激するもの様であった。

「その辺の事も含めて、また後日って訳にはいかないか？家の人間にすぐ戻って出てきてるんだ。あんまり遅くなると余計な心配をさせちまう」

御風でそういうと、なのはも恐る恐るといった様子で追従する。

「わ、私も、こっそり家を出てきているから、ばれない内に戻らなくちゃいけないの」

「じゃ、じゃあどうすれば…」

二人の言葉に困惑するユーノに、御風は軽く答えた。

「何、簡単な事だ。高町「なのは、だよ」…なのは、ユーノはお前が預かれ。そんでもって、今晚の内に詳しい話を聞いておくんだ。

それを明日俺に話してくれりゃあいい。俺の話もその時に一緒にす

る」

「明日って、どこかで待ち合わせでもするの？」

首をかしげるなのはに、御風は鼻を鳴らして、

「何言ってるんだ。あの妙な服「あ、あれはバリアジャケットと言いまして、魔導師の防護服なんです」…バリアジャケットからして、なのはも聖祥だろ？」

「う、うん。そうだけど、もしかして御風くんも聖祥なの!？」

驚き、眼をまん丸にするなのは。

「おお。俺は3年3組だ。なのはは？」

「私は3年1組!わ、御風くんが同じ学校だったなんて全然知らなかったよ」

「いや、ついさっきまで名前も知らない他人同士だったろうが」

どこか抜けた事を言うなのはに、御風は丁寧に突っ込んだ。

「まあ、そういう訳だが、ユーノは構わないか？」

置いてけぼりにされていたユーノに御風が水を向けると、ユーノは慌てたように頷いた。

「ぼ、僕は全然構いませんけど、なのはさんが…」

「なのは、でいってば。ウチなら大丈夫。ユーノくんも今日は疲れてるだろうし、ゆっくり休んでね」

「ここは好意に甘えておけ。それに、なのはも自分が使った魔法の事とか、ユーノに聞きたい事は俺以上にあるだろう？」

御風の言葉になのははこくりと頷いた。

魔法の事、ジュエルシードの事、レイジングハートの事等、聞いた事はいくらかもある。

先程はゆっくり休めと言ったのだが、これら全てを説明させるとなるととてもじゃないがユーノがゆっくり等できない事にまだ気が付いてなかった。

「よし、話は決まったな。じゃ、明日学校でな」

御風はそう言っ立ち上がり、その場を後にしようとした。

「あ、御風くん!」

踵を返そうとした刹那、なのはが御風の名を呼ぶ。

「ん？なんだ？」

振り返った御風の視線の先で、なのはがにっこり微笑み、

「今日は、助けてくれてありがとう！」

その笑顔にちよつと顔を赤くした御風は、それを隠すかの様に背を向けて、

「ま、気にすんな」

ひらひらと手を振ってそのまま去って行った。

その背中を、なのははしばらくの間見送っていた。

帰り道。

「しかし、これどうすつかねえ……」

情けない表情で呟いた御風の手の中で、すっかり溶けてたぶたぶとした感触を伝えるアイスの袋があった。

最後まで締まらない御風であった。

その夜、ベッドに潜り込んだ御風は強い興奮状態のせいで中々寝付けなかった。

その中で強く感じるの二つ。

（初めて、全力で魔法を使って戦った）

今まで、御風は己の力を決して周囲に漏らさないという枷を自ら嵌めていた。そのため、人目を忍んで行っていた魔法の修練もまた、派手な事が出来ずジレンマを感じていたのである。

だが、先の戦いにおいて全力で力を振るった事で、大きな充足感を得ていたのである。

（なんか、やばい人みたい。いかんいかん、自重しないと）

一歩間違えればバトルジャンキーの様な物騒な思考に陥り掛けた事を察して、御風は無理矢理その思考を払った。

(それに)

脳裏に浮かぶのは二人の姿。

喋るフェレット、ユーノ・スクライア。

種類が違うものの、自分同様魔法を使う少女、高町なのは。

(誰かに自分の【魔法】マテリアル・バズルを見せたのも、初めてだった)

人に話せぬ、見せる事も出来ぬジレンマ。

その二つが今日だけで解消されていた。

(明日、どんな話が聞けるんだろうな…)

少しわくわくしながら、御風はゆっくりと眠りに落ちて行った。

「またこの夢か」

御風は今、己の夢の世界に立っていた。

なぜその場所が夢である事が分かるのか、それは御風にもうまく説明できない。

ただ初めて見た時から、夢だ、と思ったのである。

そこは何もない真っ白な地平線が続く世界の中で、ただ一本の天まで届くような高さの樹が立っているだけの、何とも寂しい風景である。

加えて、その樹も幻のごとく儚い、霞のように揺らいだものであった。

普段ならば、この幻想的な風景にただ佇むだけで夢は終わるのだが、今日に限ってはいつもと様子が違った。

「あ…」

樹の枝の一本に、誰かが座っているのが見えた。そして、その人物がこちらを見つめているであろう事も。

「自分以外で【魔法】を使う人を観た感想はどうだい？」



おそらくは男性、自分よりも少し年上だろうか。

そのような曖昧な表現しかできないのも、その人影がやはり巨大樹同様、儚く、朧な存在だったからである。

「びっくりした。こんなにびっくりしたのは、初めて魔法を使った時以来だな」

御風は人影を初めて目にしたにもかかわらず、当たり前のように受け答えをしていた。

「そうだろうね。あんな魔法は俺たちも見た事はなかった」  
人影はどうやら笑った様であった。

「なあ、あんた一体誰なんだ？俺はあんたを初めて見たはずなのに、何故か知っているような気がするんだ」

御風の問い掛けに、人影は軽く肩をすくめた。

「俺たちの事はどうだっていいさ。所詮、『終わってしまった世界』の元住人が、無様に記憶の残滓にしがみついているだけなんだから」

「何言ってるのかさっぱりわからねえ」

容赦なくバツサリ切った御風に人影は肩を震わせて笑い始めた。

「くっくくくく…。いいね、元気に大きくなっているようだ」

久しぶりにあった親戚の様な言葉に、御風はますます人影の正体が分からなくなった。

「言つたら、俺たちの事なんて気にしなくていいんだ。俺たちは、君が元気に大きく育っているの見るだけで、十分なんだよ」

「はあ？」

既に御風の頭の中ははてな一色だ。

「さて、そろそろ目覚める時間だ。元気に育つんだ、俺たちの

『終わってしまった世界』の記憶のかけらを受け継ぐ、唯一の子」

「あんた、一体…」

疑問の声を上げる御風の前で、夢の世界が薄れていく。樹の上の人影もだんだんと霞んでいく。

「頑張れ、御風」

その声を最後に、御風の意識は覚醒した。

「…夢、か」

かなり遅めの就寝になったにも拘らず、御風は少しの眠気も見せず  
に起き上った。

御風がああ夢を初めて見たのは、マテリアル・パスル【魔法】を初めて使った時である。  
以来、ひと月に一回ぐらいの割合でああ夢を見ている。

「誰か出てきたのは初めてだな」

御風はあんなに夢い人影を思い出していた。

こうして改めて考えても、やはりあのような人物に心当たりはない。  
ないはずなのだが、

「なんか、懐かしいような気がするんだよな」

あれは一体、誰なんだろう、と再び思索する御風の横で、5分遅れ  
で目覚ましが鳴る。

そろそろ、学校へ行く時間である。

「ま、いいか。あの人（？）も気にしなくていいって言うてたし」

御風は頭を振って夢の事を忘れた。

さあ、気持ちを切り替えよう。今日は、彼らの話を聞けるのだから。  
昨夜眠る直前に感じたわくわくを蘇らせた御風は、勢いよくベッド  
から抜け出した。

## 自己紹介と夢の樹の残滓（後書き）

夢の樹の人物は特定しません。彼はこれからも偶に御風の夢に出てきます。

次回は状況説明編&VS犬。

信じられるかい？もう5話だったのに、まだ原作2話の真ん中ぐらいなんだぜ。

ジュエルシードとマテリアル・パズル（前書き）

初めに謝罪します。

V S 犬まで行けなかったああああ！orz

## ジュエルシードとマテリアル・パズル

翌朝、携帯電話のアラームで目覚めた高町なのはが最初にした事は、昨晩から同じ部屋で過ごす事になったユーノ・スクライアへ朝の挨拶をする事であった。

「おはよう、ユーノくん」

「あ、その、おはよう」

ユーノはまだ少し戸惑いながらも、なのはに挨拶を返した。

「とりあえず、昨日はお疲れ様」

「あ、うん、こちらこそ」

その後、帰宅したなのはとユーノを待ち受けていたのは、なのはの兄、高町恭也のお説教とユーノを巡る家族のドタバタであった。

その件もあつて、昨日は結局詳しい話を聞く事が出来なかったのである。

「御風さんに謝らないとね。ユーノくんのお話、聞く事ができなかったし」

昨夜の少年と交わした約束を果たせないと思ったなのはが残念そうに言う。

「そつだね。彼　御風に『念話』を使えばもつと簡単なんだけど」

「『念話』？」

「離れていてもその人と心で会話ができる魔法だよ」

《《こんな風に》》

「あ、これ、私を呼んだ時の…」

突如脳裏に響いたユーノの声に、なのはは自分が【魔法】と関わるきっかけを思い出していた。

《《なのにも使えるよ。レイジングハートを身につけたまま、心で僕に喋ってみて》》

ユーノに促されたなのはは、ハンカチの上に丁寧に置かれていた赤

い宝石　　レイジングハートを手にとって、ユーノに心で話しかけてみた。

《　こう？》

その声が聞こえたユーノが軽く頷いた。

《そう、簡単でしょ？》

『念話』で会話する事を覚えたなのは「わ〜」と感嘆の声を上げた。

と、ここで一つの疑問。

「あれ？ユーノくんの口ぶりじゃ、御風くんは『念話』が使えないみたいだけど、どうして？」

「それは、彼にリンカーコアが無いからだよ」

「リンカーコア？」

ユーノの口からまた知らない単語が飛び出してきた。

「リンカーコアは、魔導師が魔法を使う際に必須となる、魔力を生成するための体内機関なんだ。この機関が無いと、人は魔法が使えない」

なのはの疑問に応えるべく、ユーノが丁寧に説明する。

「この世界の人達には、通常リンカーコアが無いみたいだ。なのはは、その、特別だね」

「ほえ〜」

自分の中にあつた思わぬ【力】に、なのはは驚きの声を漏らした。

「でも、御風くんは昨日魔法らしいの使ってたよ？なのに、御風くんにはリンカーコアが無いの？」

なのはの言葉に、ユーノは頭を抱えた。

「そうなんだ。普通ならばあり得ない。彼の使う【魔法】は、もしかしたら僕たちの使う【魔法】とまったく別の物なのかもしれない」  
初めて見た御風の【魔法】は、マテリアル・バズル聡明なユーノにしても全く理解不能なものであった。

思索に耽りそうになっていたユーノは、なのはが言葉の続きを待っているのを察して、慌ててそれを中断した。

「…まあそれは置いて。とにかくこの『念話』があれば遠くで何をしていても状況説明ができるんだけど…」

「リンカーコアのない御風くんには伝わらない、かなのははうくと唸って手を組んだ。

「御風くんは昨日あ言つてたけど、できればユーノくんが直接説明してくれる方がいいよね。私じゃうまく話せるかどうかかわかんないし」

「やはは、と少し困ったように頬を掻くのは。その言葉を聞いたユーノに、閃くものがあった。

そう、何も『念話』で話す事に拘らなくてもいいのである。

「なのは、図々しいとは思うけど、一つお願いがあるんだ」

「ふえ？」

申し訳なさそうに言うユーノに、なのは首を傾げた。

その日、私立聖祥大学付属小学校3年3組の昼休み。

昼食を終えたばかりの御風に、クラスメートの一人が声をかけてきた。

「御風ー、お客さんだぜー」

「あ？」

そちらに目をやると、昨日知り合ったばかりの少女、高町なのはの姿があった。手にはお弁当なのかバスケットが一つあった。

「女子からの呼び出しだ！」

「ひゅーひゅー！」

「結婚式はいつですかー!？」

周りの男子が囁し立てる中、御風は彼らを見回し、ふっ、と口元を歪めた。

「うらやましいのか？」

「「「「うらやましいに決まってるだろがあああっ!」」」」

男子達は御風の言葉にorzの姿勢になって激しく落涙した。

「なぜだ！？なぜこの世には富める者と貧しいものが存在するのだ！？」

「リア充なんか消えてしまえ！」

「っていうか、あれ高町さんじゃねえーか！我が学年で3本の指に入る美少女の！」

「っていうかその3本の指が全員一つのクラスに納まってるとどいう事だよ！ちなみに俺はバニングス派だ！」

「それは月村さん派の俺に対する挑戦だな！？ツンデレなんてもうはやんねえんだよ！時代は清楚なお嬢様だ！」

「それこそ時代遅れとなぜわからん！？」

「っていうかその3人に限らず、1組って美少女が多いよな。ウチはちよつとあれだから」

「ちくしょう！神よ、校長よ！なぜ俺を1組にしてくれなかったんだあ！ウチはちよつとあれなのに！」

「……何だこの男子共！！ぶつ殺す！！」

暗にこのクラスには美少女がいないと言われた3組女子達は、怒りの雄叫びと共に不用意な発言をした男子達に襲いかかった。

「さ、行こうぜ」

「あれ放つといていいの！？」

何事もなかったかのような御風に、なのはは阿鼻叫喚となった教室を指して突っ込んだ。

「あー、気にすんな。一日に一回はあんな感じだから」

「毎日なの！？」

自分の予想を遥かに超えたはっちゃけぶりを見せる3組に、なのはは目を白黒させた。

私立聖祥大学付属小学校3年3組。少しおませさんと活発な子が多い以外は、普通のクラスである。



混乱の増埒となった教室を後にした二人が向かったのは、あまり人気がない、中庭の裏手であった。

「ところでなのは。昼がまだなら先食っちゃっていいぞ」

御風がなのはの持つバスケットを指して言うと、

「お昼ならもう食べたよ。これはお弁当じゃなくて」

なのはがバスケットの蓋をひょいと開けると、そこから一匹のフェレットが顔を出した。

「ユーノ？よく学校に連れて来れたな」

「先生から隠すのがちよつと大変だったけど、アリサちゃんとすずかちゃん　お友達の二人が協力してくれたから」

その代償にユーノは二人にもみくちやにされていた。

「んで、どうしたんだ。わざわざ学校まで来て」

御風の言葉に、少しくたびれた様子のユーノが答えた。

「う、うん。昨日は、色々ドタバタしてて結局なのはに事情を説明できなかつたんだ」

「ほう、それじゃ、今日この場で俺達二人にまとめて説明するつもりだと？」

「いや、なのはにはもう『念話』で授業中とかに説明はしてるんだ」

「『念話』？」

朝のなのはのように首をひねる御風。

「それを説明する前に、ちよつと試したい事があるんだけど、いい？」

「お？おお」

御風が頷くと、ユーノは目を閉じて何かに集中するかの様な仕草を見せた。

「……………やっぱり駄目だ。通じてない」

何の反応も示さない御風に、ユーノはがっくりと肩を落とした。

「？どういう事だ？」

困惑する御風に、ユーノが『念話』の事、リンカーコアの事等、朝

なのはにした説明を繰り返して御風に伝えた。

「リンカーコアねえ」

「うん。だからリンカーコアも無しに使う御風の魔法は、僕達からすれば常識外れの代物なんだ」

同じ魔法使いから非常識だと言われた御風は、思わず渋面を作った。  
「そんな事言われてもなあ。俺の【魔法】はガキの頃から自然と使えるようになった物だし」

「だから、御風にその辺りを詳しく話してもらいたくて、ここに来たんだ」

好奇心に目を輝かせるユーノに、御風は落ち着かせるかのように手を翳した。

「まあ、待て。それよりも、昨日の怪物とか、何でフェレットがしやべってんだとか、そっちの事情を先に聞かせてくれないか」

御風の言葉に、ユーノは己の状況を思い出し、急にしょんぼりとした。

「……ごめん。昨日は巻き込んでしまったのに……」

「い、いや、それについてはもういって言ったる？だから、な？」

そのあまりに凹んだ様子を見かねた御風が、少し焦ったようにユーノを宥めた。

「……ありがとう。それじゃあ、まず僕の事だけど、今でこそフェレットの姿をしてるけど、僕は本当は人間なんだ」

「えーっ!？」

ユーノの言葉に何故かなのが驚いた。

「いや、なのは。お前事情聞いたんじゃなかったのか」

「ユーノくんが人間だなんて聞いてないよ!」

「あ、あれ？言わなかったっけ？」

「言っていないよー!」

激しく混乱するなのはに、困惑するユーノ。

收拾が着かない二人の様子に、御風は溜息をついた。

「落ちつけ。……まったく、なのはが先に驚くから、俺が驚き損ね

ちまつたじゃないか」

「う、ごめんなの……」

「まあ、そこはいい。とりあえず、ユーノがしゃべるのは、本当は人間で、今はフェレットになってるからなんだな？ つーか、それも【魔法】なのか。何でもありだな」

「み、御風に言われたくはないけど、まあその通りだよ」

「ふーん、で、そんなお前は一体何者な訳なんだ」

「僕は、こことは違う次元世界からやって来たんだ」

「知らん単語ばかり出てくるな。次元世界って何だ？」

「次元世界とは、次元空間にある様々な『世界』のことを指すんだ。その世界は魔法がこの世界で言う科学の様に発達していて、僕もその恩恵に預かっている。そんな世界はそれぞれが独立した歴史を持つていて、並行して存在している。次元空間を海、次元世界を島と考えて頂ければ解りやすいかな？」

ふむふむと頷く御風。その横で、何故かなのはも頷いている。どうやら一度の説明では把握できていなかったようだ。

「そしてその次元世界には、余りにも文明が発達しすぎてしまい戦争等が起こった時に、その進化し過ぎた技術が周辺の世界までも巻き込んで滅ぼしてしまう事が時折ある。そんな高高度文明、超古代文明が残した遺産。それを『ロストロギア』と僕達は呼んでいるんだ。このロストロギアは、遺産と呼ばれるだけあって現在の科学、魔法文明等では到底理解の出来ない程の超技術で作られていて、物によっては、それ単体で世界を滅ぼす事が出来るような物まであるんだ」

ユーノの長広舌をそこまで聞いた御風が、得心いったかの様に手をぼんと叩いた。

「なるほど、読めたぜ。昨日の青い石、あれがお前の言うロストロギアなんだな？」

御風の言葉に、ユーノは満足げに頷く。

「その通り。あれの名は『ジュエルシード』。手にした者の願いを

叶える、魔法の石。……本来はね」

その含みのある言葉に、御風は怪訝な顔になる。

「本来はって……、今は違うのか？」

「うん。力の発動が不安定で、単体で暴走した揚句、使用者を求めて周囲に危害を加える場合もあるんだ」

御風は昨日に黒い怪物を思い出した。

「昨日の奴の事が」

「そう、それにたまたま見つけた人や動物が間違っ使用してしまつて、それを取り込んで暴走する事もある」

ユーノの言葉に、御風の額に冷や汗が浮かぶ。

「なんつー危ない代物だよ……。でも、そんなのが何でうちの町にあつたんだ？」

それを聞いた途端、ユーノは先程よりも更に落ち込んで頂垂れた。

「……僕の……所為なんだ」

「え？」

「僕は故郷で、遺跡発掘を仕事にしているんだけど、ある日、古い遺跡の中でアレを発掘して……。調査団に依頼して、保管してもらつ事になっていただけ、運んでいた時空間船が、事故か、何らかの人為的災害に会つてしまつて、21個のジュエルシードがその時に近くのこの世界に降り注いでしまつたんだ」

「21個もあんのか……」

「今まで回収できたのは、昨日の物と合わせても2つだけ。残りは19個。1つでも発動し、暴走を始めてしまえばこの世界は滅びてしまつ……」

「予想以上のヤバさだな……」

予想を遥かに超えて逼迫した状況に、御風は思わず息を呑んだ。

「でもよ、その話のどこにお前の所為だつて部分があるんだ？」

「アレを発掘したのは僕だから……。全部見つけて、ちゃんと有るべき場所に返さないといけないから……」

固い決意を込めたユーノに御風は、

「てい」

「あだつ!？」

「ゆ、ユーノくん!？」

でこピンを食らわせた。

額を押さえて悶絶するユーノを、なのはが慌てて介抱する。

それを横目に、御風は言葉を紡ぐ。

「あのな、真面目なのもいいけど、度が過ぎるとただの独り善がりになっちまうぜ?お前は这个世界を見捨てる事だつてできたんだ。それをしなかったのはお前が凄えいい奴だからだと思う。でもそれと一人で無茶しようとしたのは別だぜ」

「それは、そうだけど……」

御風の言葉にユーノ口ごもる。

「それに、その遺跡発掘とやらをしてんのは、別にお前一人じゃないんだろ?もしかしたら、別の奴が見つけた可能性もあるんだ。そいつが独善的な奴なら、この世界は見捨てられて、訳も分からないまま滅んでたかもしれん。それを考えりゃ、ユーノが発掘したのは不幸中の幸いって奴だ」

「でも……」

「そうだよ、ユーノくん」

なおも言い募ろうとするユーノを、今度はなのはが押し留めた。なのははユーノを目の高さまで抱き上げると、目をまっすぐに合わせ言った。

「ユーノくんは悪くなんかないよ。それに、過程はどうあれ、昨日みたいな事が度々あったら、ご近所の迷惑になっちゃうから、ね」「ご近所で済む問題じゃねえと思うが、まあそういう事だ。この世界にジュエルシードがある以上、もう他人事じゃねえ。ここまで来たんだ。ユーノ、お前は黙って俺達に助けを求めりゃいいのさ」

そう言っただけで笑う御風と、ニコニコしながらこちらを見つめるなのは。二人を交互に見たユーノはしばらくの後、

「……ありがとう。そして改めてお願いします。僕に力を貸して下さい」

さい！」

それを聞いた二人の答えは、言うまでもない。

「さて、今度は俺の番だな」

即席ながら『海鳴ジュエルシード探索隊』が結成された後、御風が自分の魔法について語り始めた。

ユーノとなのはは、何故か正座してそれを聞いている。

「この世界には、地にも水にも、花にも樹にも、ありとあらゆるものにその根源的なエネルギー、『マテリアルパワー魔力』が宿っている。」

世界の神秘を語るかのような御風の静かな語り口に、なのはとユーノは知らずに引き込まれていた。

そして、当の御風自身はというと、内心で少し驚いていた。

自分にとって魔法とは感覚的に使っている代物であり、このように筋道を立てて説明できるとは思ってたなかったのである。

まるで、御風の口を借りて、何者かが喋っているかのような、そんな感覚であった。

「そんな魔力を己が魔力を持ってパズルのように分解／再構成する事により、まったく新しい法則を生み出す。それが、『マテリアル・パズル魔法』」

「マテリアル……パズル……」

ユーノは呆けた様に呟いた。

「そしてこれが俺の『マテリアル・パズル魔法』」

なのはとユーノが見ている前で、御風は【魔法】を発動させる。

二人の眼前で風が逆巻き、御風を集っていく。かちやかちやと何かが組み合わさる音と共に、それは形を整えていく。

「風の中に流れる魔力を組み替え、新たな風を、そして自在に天を舞う翼を生み出す魔法、その名も『エンゼルフェザー』だ」

御風の背に昨夜見た白光の双翼が顕現していた。

再びそれを見たユーノとなのはは昨日同様目を見開いて、食い入る

ように見つめた。

「ま、何でそんな事が出来るのかと、そういうのは勘弁な。さつきも言った通り、ガキの頃にいつの間にか使えるようになってたんだから」

そう軽く言う御風に、なのはとユーノは気を抜かれたのが、大きく息を吐いた。

「昨日はバタバタしててよく見れなかったけど、すつごくきれいだねー」

なのはが、生み出された翼の美しさに目を輝かせる。

「不思議だ、見れば見るほど不思議だ。どうすればこんな事が出来るようになるんだらう？」

ユーノはしきりに首を傾げながらぶつぶつと呟いている。

御風は自分の翼を誰かに見せた事などなかったため、そんな風にじろじろ見られるのは当然初めてであり、なんだか気恥かしい思いをしていた。

その時、御風の背中が軽く粟立った。

何かが、常人には感じ取れない何かが、大気を揺らしたのを感じたのである。

その方向に目をやれば、なのはもユーノもそれに気付いたのと同じ方向を見ていた。

「おい、これってまさか……」

「うん、間違いない！ジュエルシードが発動したんだ！」

「た、大変！」

三人の絆は結ばれた。そして、再び戦いの幕が開く。

## ジュエルシードとマテリアル・パズル（後書き）

説明回でした。

本来ならこの辺をもっと短くして神社で犬と戦わせようと思ったんですが、予想以上に長くなっちゃったので、次に回します。次回は（U ^ ^）わんわんお！をお楽しみ下さい。



神社と犬(前書き)

(U ^ ^) わんわんお!(U ^ ^) わんわんお!

## 神社と犬

緑に囲まれた静かな神社の境内。

その中で、一人の女性が恐怖に身を震わせていた。

その目の前で、獅子か虎並みの黒い巨軀を持つ、四つ目の四足獣が牙を剥き出して唸りを上げていた。

女性は己の目が信じられなかった。目の前にいるこの怪物は、ほんの数分前まで自身が散歩に連れていた小さな犬だったのだ。

恐怖と混乱の極みに達した女性は、目の前に迫る危機を前に自分の意識を手放した。

黒い魔犬は気絶した元飼い主に向かって、ゆっくりと歩を進めようとした。

だが、次の瞬間何処からか放たれた不可視の衝撃が、魔犬の巨軀を吹き飛ばした。

空中で身を捻り着地した魔犬は、四つの目に獰猛な光を浮かべて衝撃の放たれた方向に体を向けた。

果たしてそこには、一人の少年と一人の少女。そして一匹の小動物の姿があった。

十数分前。

私立聖祥大学付属小学校の裏庭にて、三人の人間が世界を揺るがす異変を感じていた。

一人はユーノ・スクライア。現在はフェレットの姿だが、歴とした人間。異世界より『ジュエルシード』を回収するためにこの世界に降り立った【魔導師】である。

一人は高町なのは。ほんの一日前まで平凡な小学3年生だった少女。その身に秘められた特異な才能を見込まれて、ユーノを助けるため

に魔法の力を手にした【魔法少女】である。

そして最後の一人が天馬御風。マテリアル・バズル【魔法】と自身が呼ぶ特殊な力を使い、風を操り、翼を以って自在に天を駆ける【魔法使い】である。

「ジュエルシードが発動した……！」

ユーノが緊張に顔を強張らせる。

「す、すぐに回収しなきゃ！」

なのはが身を翻して校外へ出ようとすると、御風がその肩を掴んで止めた。

「待て。こんな時間から学校を出ようとすれば、確実に守衛に止められるぞ」

私立聖祥大学付属小学校には、裕福な家の者が多い。

よって、その安全を守るために校門には屈強な守衛が詰め所にて常駐している。

昼休みとは言え、校外へ出ようとすれば、確実に彼らに呼び止められてしまうだろう。

まさか世界の危機を救いに行くとも言えないので、なのはは頭を抱えた。

「じ、じゃあ、どうしよう!？」

「僕一人なら何とかできるだろうけど……」

ユーノも隣で同様に頭を抱えている。魔力を極限まで抑えるためにフェレットに変じている今の自分では、ジュエルシードを回収できるかわからない。最悪、返り討ち、という事も十分にありうる。

「お前ら、俺が誰か忘れてないか？」

うんうん唸る二人に、御風が不敵な笑みを見せる。

「なのは、ユーノ。ちよつと後ろ向け」

怪訝な顔をしながらも御風の言葉に従って後ろを向く二人。御風はそんな二人の背中にそれぞれ手を置き、己が【魔法】を発動させる。

マテリアル・バズル「【魔法】エンゼルフェザー！」

御風の手が置かれた部分から風が逆巻き、その魔力が組み替わっていく。

そしてその手が離れた時、なのはとユーノの背中には白い光で構成された一対の翼があった。

「は、羽が生えたの!」

「こ、これは!」

自分達の背中に顕れた翼に、なのはとユーノが驚愕の声を上げる。

「ここから飛んでいきや、守衛にも見つからねえ」

同じように翼を出した御風が笑う。

「み、御風くん。私、空を飛んだ事なんてないんだけど……」

なのはが羽根を確認するためか、その場でクルクル回りながら言う  
と、

「心配すんな。羽の操作は俺がする。お前らは、力を抜いて身を委ねるんだ」

そう言うなり、三人の羽がそれぞれさりと羽ばたき、その体がふわりと浮かんだ。

「え?え?え?」

困惑するなのはに構わず、御風は羽に込めた魔力をさらに上げる。

「行くぞ!」

そして、三人は一気に空高く舞い上がった。

「にゃあああああ〜っ!?!」

なのはの悲鳴を後に残して。

耳元をびゅうびゅうと物凄い風切り音が過ぎていく。

その音といきなりかかった浮遊感に、なのはは思わずギョツと目を閉じ体を縮こまらせた。

「おい、なのは。何目え閉じてんだ。もったいないから、開けてみな」

御風の声が聞こえる。その声に、なのはは恐る恐る閉じていた瞼を上げた。

そして、見た。

「うわぁ〜……！」

通常ならば絶対にお目にかからないであろう、上空から見る海鳴市がそこにはあった。

自分の家、自分の通う小学校、そして友達の家。

知ってる場所も知らない場所も、全てがなのはの眼下にあった。

「すごいすごいすごい！」

先程の恐怖も忘れ、なのはは目の前に広がる景色に歓声を上げた。

「凄えだろ？俺が一番好きな景色なんだよ」

御風が得意げに言う。

実際、御風はこの景色を誰かと共有したかったのだ。一人で見るには、あまりにも贅沢すぎる光景だと、いつも思っていたのである。

『マスター』

わ〜、わ〜と騒いでいたなのはに、それまでずっと黙っていたデバイス『レイジングハート』が声をかけた。

「何？レイジングハート」

『私の中には飛行のための魔法もプログラムされています。これを習得すれば、マスターも空を飛ぶ事が可能です』

「ホント！？レイジングハート！」

『イエス』

レイジングハートの言葉に、なのはは大いに喜ぶ。

「ほお、そいつはいいな。なのは、飛べるようになったら一緒に飛んでみようぜ。面白そうだ」

「うん！」

御風の言葉に、なのはは嬉しそうに頷いた（因みにユーノは自身の状態に興味津津で、しきりに観察していた）。

なのはと共に笑っていた御風だが、ジユエルシードの魔力に近づいてきた事を感じて顔を引き締めた。

「さて、おしゃべりはここまでだ。そろそろ着くぞ」

「……うん！」

なのはとユーノも緊張の面持ちで頷く。

そして神社の上空まで差し掛かった時、三人は黒い獣の様な怪物が女性に襲い掛からんとする光景に出くわした。

「ひ、人が！」

「ちっ！」

御風は手を突き出し魔力を練り、周辺の風を組み替えて【魔法】を発動させる。

「マテリアル・バズル【魔法】エンゼルフェザー、ヴァイント・カノーネ『風の砲撃』！」

「どごおんっ！」

発動した魔法は風の砲弾となって飛び、轟音と共に怪物に喰らいついた。

その衝撃に怪物は吹き飛び、女性から大きく離される。

そして怪物が怯んだその隙に、三人は神社の境内に降り立った。

対峙する魔犬と三人。

御風は残りの二人を守る様に一步前に出た。

「昨日と同じパターンだ、なのは。俺が奴の足を止める。お前はその隙に封印しろ！」

「わかったの！」

なのははこくりと頷く。

「なのは、御風、気を付けて！昨日と違って、あいつは原住生物を取り込んでるみたいだ！」

「それって、昨日のよりも？」

「うん、実体がある分手強いはずだよ」

ユーノの注意勧告に、御風は改めて気を引き締める。

「じゃあ、ますます気張らねえとな！」

御風の敵意に反応したのか、魔犬は咆哮と共に襲いかかってきた。

「うるあっ！！」

そして御風が展開した風の障壁と激突し、凄まじい衝突音を辺りに響かせる。

「なのは、今の内にレイジングハートの起動を！」

「うん！……って、起動ってなんだっけ？」

「え、」

なのはのまさかの言葉に、ユーノは尻尾を逆立てて固まった。

「『我は使命を』から始まる起動パスワードだよ！」

「え〜っ!? あんな長い覚えてないよ〜!!」

「も、もう一回言うから繰り返して！」

「わ、わかった！」

その時、御風の焦燥に満ちた声が響いた。

「なのは、ユーノ！そっちに行つたぞ!!」

「「えっ」「」

見れば、魔犬が御風の頭上を飛び越え、なのはとユーノに向かって駆けて来る。

どうやら手強いと判断した御風よりも、組み易しと思ったなのはとユーノを先に仕留めるつもりのようなのだ。

魔犬の鋭い牙と爪に引き裂かれてはもちろん、あの巨軀にぶつかられただけでも大けがでは済まないだろう。

「……きゃあっ！」

小さな悲鳴を上げて、その身を強張らせるなのは。その体が吹き飛ばされると思われた刹那。

キーンッ！

手に握りしめていたレイジングハートが光り輝く。

その輝きに気押されたのか、魔犬は自ら体を押し留める。

「レイジング……ハート？」

『スタンバイ・レディ。セット・アップ』

レイジングハートの声と共に、輝きがさらに強まる。そして、なのはの手の中に杖の形態に変化したレイジングハートが握られていた。「パスワードもなしにレイジングハートを起動した!？」

ユーノが驚愕の声を上げる。

その時、様子見をやめた魔犬が、再びなのはに向かった突っ込んできた。

「なのは、防護服を！」

「へ？あ、はい！」

『バリア・ジャケット』

そして轟音と共に今度こそ魔犬がなのはに衝突した。

「なのは！」

ユーノが焦りに満ちた声でなのはを呼ぶ。

果たして土煙の晴れたそこには、白と青のバリアジャケットに身を包んだ無傷のなのはの姿があった。しかし、魔犬の姿はない。

慌てて周りを見回せば、鳥居の上に陣取りこちらを睥睨する魔犬がいた。そしてそのまま大きく跳躍し、高高度からの攻撃をなのはに繰り出す。

なのははとつさにレイジングハート翳した。するとそこからなのはの魔力光である桃色の魔力障壁が発生し、魔犬の攻撃を防いだ。

障壁と魔犬の間で火花が散る。必死に防ぐなのはの杖の先で、レイジングハートの冷静な声が響いた。

『プロテクティブ・コンディション・オールグリーン』

その声と共に一際強くなった障壁が、魔犬を大きく吹き飛ばす。

当然、なのははまたしても無傷である。

「あの衝撃をノーダメージで……。やっぱりだ。この子、凄い才能を持つてる」

ユーノがなのはの様子を感嘆の瞳で見る。

もんどりうって倒れる魔犬だが、すぐに起きあがり再度攻撃をしかけようとした瞬間、

「させるか、コラあつ！」

やっと追いついて着た御風が、その横腹目掛けて羽のオーラを纏わせた蹴りを突き刺した。

威力の大きく増したこの一撃に、魔犬は三度吹き飛ばされる。



それでも尚、よるめきながら立ちあがった魔犬は、怒りに燃える四つ眼を御風達に向けその小さな体に牙と爪を突き立てんと飛び上がった。

だがしかし、飛び上がったその先で、魔犬の体が宙に浮く。その体からは、一対の白い羽が生えていた。

「マテリアル・パスル【魔法】エンゼルフェザー！さっき蹴った瞬間に、お前の体に羽の魔力を流し込んで置いたんだ！」

そう言つて得意気に笑う御風。

「凄い、あんな風に使う事も出来るのか」

ユーノ達の使う『バインド』にも似た効果を発揮する御風の魔法に、ユーノは感心したように呟く。

「なのは、今の内に早く封印しろ！」

「うん！レイジングハート、お願いね」

『オーライ。シーリング・フォーム・セット・アップ』

頷いたなのは、レイジングハートをジュエルシードを封印するための形態へと変化させる。

杖の先端部、金色のパーツの根元が開き、そこから桃色の羽が飛び出す。

『スタンバイ・レディ』

なのはがレイジングハートを空中でもがく魔犬に向けると、そこから光の帯が伸び、魔犬の全身に絡みついた。魔犬の額にXVIIの文字が浮かび上がる。

「リリカルマジカル！ジュエルシード、シリアル16、封印！」

『シーリング』

なのはとレイジングハートの声が響き渡り、魔犬は苦悶の声を上げながら光の中に消えていった。

その後に、青く小さく光るジュエルシードが浮かんでいた。

ジュエルシードが、レイジングハートの宝玉内に吸い込まれていく。

『レセプト・ナンバーXVII』

レイジングハートの静かな声が、ジュエルシードの封印が完了した

事を示していた。

「ううん……」

境内に寝転がっていた女性は、小さく呻きながら起きあがった。

「あれ？私一体……」

そこに、彼女が飼っている小型犬が甘えた声を出しながら駆け寄って来た。

「転んで、頭でも打ったかな？」

首を傾げながら、女性は犬を抱き上げて境内を後にした。

「行ったか……」

女性が立ち去ったのを確認して、御風達三人は隠れていた茂みから顔を出した。

「わんちゃんがぶじでよかったね」

取り憑かれていた犬に怪我一つなかった事に、なのはほっと胸を撫で下ろした。

「そうだな。後味の悪い思いをせずに済んだ」

御風も安堵の表情を浮かべている。

「封印魔法で、ジュエルシードの魔力の波動を完全にシャットアウトしたからね。その影響を受けていた犬はただ元に戻るだけなんだよ」

ユーノがなのはの肩に乗りながら言う。

「それにしても、なかなかいいチームワークだったな。即席チームにしちゃ」

「そうだね」

御風の言葉になのはが微笑む。

前衛を務める御風。

助言、及び補助を担当するユーノ。

そして後衛にて決めの一撃を放つのは。

偶然ながら、それぞれの役割は上手く嵌っていたのである。

「これで、3つめ。残りは18、か」

「うん、この調子で頑張ろうね！」

「……………ご迷惑をお掛けします」

「いや、だからそれはもういいから」

ワイワイと談笑していたその時、ふと己の腕時計に目をやった御風が素っ頓狂な声を上げた。

「あああああああああつ!?」

その大声に、なのはとユーノはびっくりして目を丸くした。

「ど、どうしたの、御風くん？」

「どうしたじゃねーよ!あと5分で昼休みが終わっちゃうじゃねーか!」

「へ?……あーっ!?!」

気付いたなのはも思わず声を上げる。

「た、大変!遅刻しちゃう!」

「な、なのは!背中向け背中!すぐに飛んで戻るぞ!」

『マスター、この場で飛行魔法を覚えますか?』

「そ、そんな時間ないよー!」

「つて、僕を置いていかないでー!?!」

静かな神社の境内に、三人の声が響き渡った。

私、高町なのはが魔法使いになってからの長い一日がやっと終わっていきます。

新しくできた友達、ユーノくん、それに御風くんの事。魔法の事、不安な事やよくわからない事。

とにかく、たくさんあるんですが。

「急げ急げ！あと2分んんんっ！」

「にゃあああぁっ!?!?もつとスピード落としてー!?!?」

「落ちる、落ちる、落ちちやうううっ!?!?」

とりあえず、色々頑張っついていかなきゃ、と思います。

「あ、ユーノが落ちた」

「にゃーっ!?!?」

## 神社と犬（後書き）

やっと原作第2話終了だよ……orz。

無印完結までにいつまでかかるんだろ、これ。

余談ですが、作中において事件の起きる時期が少し早い場合がありますが、極力整合性が取れるよう頑張りますので、ご容赦下さい。

さて、今回は少しキングダムゾンツ！&オリジナル回。

御風が一人でジュエルシードの回収に挑みます。

そして、運命の名を冠するあの子も登場！

それではまた。

鮫ともう一人の魔法少女（前編）（前書き）

「……本当なのか、K林？」

「ああ、この小説のヒロインはなのはじゃない」

「！」

「そして作者にとって、『ユー×なの』こそが至高だったんだよー  
！！」

「な、なんだってー！？」

風の魔法使い、始まります。

## 鮫ともう一人の魔法少女（前編）

力なく肩を落とした少女がいる。

時折その肩が震えるのは、涙を堪えているからだろうか？

少女の名は、高町なのは。

数日前まで、平凡な小学3年生だった少女。そして今は、この地に降り注いだ災厄を払うために、魔法の力を手にれた【魔法少女】である。

なのはの目に前に、傷ついた海鳴の町並みがあった。

件の災厄、『ジュエルシード』によってもたらされたそれは、なのはの心に深い自責の念を与えていた。

なのははこの惨状の原因となったジュエルシードに心当たりがあったのだ。だが、連日の探索による疲れ、久しぶりに訪れた心安らぐ時間。それらが、気づけたはずのそれを気のせいと割り切ってしまったのであった。

もしあの時こうしていたら。もしあの時あしていたら。

いくつものifは、現実の前では何の意味もない。

なのはは、ただひたすら己を責め、その小さな唇をかみしめていた。

そんななのはの背中を、二つの視線が見つめていた。

一人はユーノ・スクライア。

ジュエルシードを回収するために、違う次元からやって来た魔導師。そしてもう一人は、天馬御風。

自身が【魔法】と呼ぶ超常の力を振るう魔法使い。

共にジュエルシードを探索する三人であったが、今のははに対しては、どのように声をかけたらいいのか途方に暮れていた。

「……おい、ユーノ。お前がなのはを慰めて来い」

不意に御風が、ユーノ耳元に口を近づけ小さな声で囁いた。

「えっ、僕が!？」

ユーノが慌てて聞き返すが、御風は当然といった顔で頷いた。

「俺となのははまだ知り合って数日ぐらしか経ってないし、クラスが違うせいで学校でもせいぜいが挨拶を交わす程度。今日みたいにジュエルシードを探索する時ぐらいいしかつるんでない。だからこんな風になのはが落ち込んでたら、なんて言っていていいのかわからねえ」

「う、うん……」

知り合った期間云々を言ったら僕もなんだけど、と内心ユーノは思ったが、勢いよく話を続ける御風に口を挟めなかった。

「でも、お前は普段からなのはの家でも一緒だし、多少なりともなのはの事をわかってる筈だ。……少なくとも俺よりは」

因みに、二人ともやけになのはを慰める事に抵抗しているが、別になのはの事が嫌いなわけではない。ただ、心配なあまり、逆にどう声を掛けたらいいのかわからないのである。

「そ、そうかもしれないけど、僕も御風と似たり寄ったりだと思うよ」

ユーノが首をぶんぶん振る。

「そうでもねえ。お前は【魔法】に関してなら、なのはにとつて『師匠』みたいなもんだろ？俺にはない絆っつーもんがるはずだ」

「でも……」

なおも洩るユーノに、御風は業を煮やしたかのようにさらに言い募った。

「だーっ！はつきりしねえな！弟子が失敗　つつても、別になのはに非はねえが、ああやって落ち込んでんだ！師匠なら、なんとかしてやるうって気にはなんねえのか!？」

その言葉に、ユーノの脳裏に何時かのなのはが思い浮かんだ。

ジュエルシードがこの町に降り注いだ原因に関して、自責の念に駆られた自分を慰めてくれたのはなのはであったはずだ（後、目の前



にいる御風も)。

ならば、今度は自分がなのはを慰める番ではないだろうか。  
そう思い至ったユーノは、

「……わかった。僕が行ってくる！」

決意を眼に宿らせて、力強く頷いた。

そして、御風が見守る中なのはに近づいていき、その距離がほんの僅かになった時、ユーノの体が淡い燐光に包まれた。

それを見た御風は、驚きに目を丸くした。

「なのは」

なのはの耳に、ユーノの声が聞こえる。その場所がいつも聞こえている所よりも高いのは、御風の肩にでも乗っかっているのかもしれない。

なのはは小さな体をきゅっと強張らせた。

怒られるのだろうか。詰られるのだろうか。

嫌われて、しまう

のだろうか。

恐る恐る振り向いたなのはは、予想外の光景に目を見張らせた。

そこに思っていた御風の姿はなく、代わりに一人の少年が立っていた。

年の頃は自分と同じくらいだろうか。民族衣装のような不思議な服に身を包んだ、淡い金髪に緑の瞳を持つ、少女と見紛うような顔立ちをした少年が。

見覚えが無いはずなのに、なのははその少年を知っている様な気がした。

「なのは」

そして、少年の口から自分の名前が呼ばれ、それがよく知る友達の声だと気付いた時、なのは再び驚いた。

「ユーノくん……なの？」

「この姿で会うのは初めてかな？」

少年 ユーノ少し照れたようにはにかんだ。

ユーノは、いまだ驚きに固まるなのはの横に立ち、損壊した街並みに目を落とした。

「ごめん、なのは。これも、僕のせいだ」

「違うよ！」

沈痛な面持ちのユーノに、なのは叫んだ。

「これは、私のせいだよ……。だって私、気づいてたんだ……。あの子がジュエルシードを持っているって事。でも、気のせいだって思っちゃったんだ……」

そう言つて、今にも泣き出しそうな顔をするなのは。

「……なのはあの時、僕がジュエルシードの事で落ち込んでいた時、僕のせいじゃないって言ってくれたね」

「それとこれとは……違うよ」

「違わないよ」

ユーノは静かに首を振った。

「今日のこれは、なのはのせいじゃないよ。でも君は優しいから、こんな言葉じゃ自分を許せないかもしれない。だから、なのは。君が今抱えている悲しみを、僕にも半分背負わせてほしい」

「え……」

俯いていたなのはが顔を上げる。

「君は否定したけど、やっぱりこの惨状の責任の一端は僕にある。

だから、君が全部の責任を感じる事なんてないんだ」

「でも」

何か言おうとしたなのはを、ユーノが押し留める。

「元々は僕の責任なのに、今君に背負わせてしまっている事自体、僕にとつては心苦しいんだ」

ユーノは悔しそうに顔を歪めた。

「僕は、弱い。僕がもっと強かったら、そもそもなのはにこんな悲しい思いをさせる事なんてなかった」

そしてユーノは、なのはと真っ直ぐ目を合わせた。その力強い瞳に、なのはの鼓動が一瞬高鳴る。

「今の僕はこんな慰めしかできない。でも、いつか僕はもっと強くなる。心も、体も。もうなのはが傷つかないように。もうなのはを傷つけないように」

「ユーノくん……」

「それまではせめて、君の心を、守らせてほしい」  
しばしの静寂が辺りを包む。

「うん……。でも、一人で強くなるなんて、言わないでね」

なのはが微笑みながら言う。

「一緒に、強くなるう。一緒に、頑張ろう。初めはユーノくんのお手伝いだったけど、今は私がこの町を、私の意思で守りたいから。だから一緒に頑張ろう、二人で」

「……ああ！一緒に頑張ろう、なのは！」

「うん！」

そうやって、なのはは花がほころぶ様な笑みを見せた。その頬を、初めて感じたほのかな思いに、少し赤く染めながら。

その頃。

（色々と突っ込みたい事はあるけど、まずこれが一番言いたい。「二人で」って言いやがった！なのはの奴「二人で」って言いやがった！俺の存在、全無視かよ！それで何だ、このピンク色の空間は？何でこういう事になった？畜生、あの極太ビーマーめ。桃色なのは魔法だけじゃないってのか！まあ言わないけどね！俺風を使う魔法使いだし！空気読めるし！）

その存在を完全に忘れ去られた御風が、浸食してくるピンク色の空間に辟易しながらブチブチと不満を漏らしていた。

町の一件から数日後、事態は特にこれといって動かなかった。

なのはとユーノは、表面上はいつも通りなのだが、ふとした事で互いを意識してしまうのか、何とも初々しい反応をする時がある。その度に、御風は口から砂糖を吐いていた。

そんなある日の休日、御風はいつもの様にジュエルシードの探索に赴いていた。だがそこに、なのはとユーノの姿はない。

何でも、友達の家にお茶会に誘われたらしい。

なのはは御風も来ないか尋ねてきたが、知らない人ばかりいる空間で気まずい思いをするなんて真つ平ごめんだった御風は、丁重にその誘いを断った。

そして一人でジュエルシードを探している時、偶然出会ったクラスメートの一人が声を掛けてきた。

「みかつちゃん、今、暇？皆と公園でサッカーしようって話になってるんだけど」

「あー、悪い。今日はちょっと……」

「ちえー、またかよ。ここ最近、みかつちゃん付き合い悪いなー」

「すまん。この埋め合わせはまたいつか」

「今まで埋め合わせてもらった覚え何て全然ないけど。あ、そう言えばみかつちゃん、知ってる？」

「知らねえ」

「いや、話が進まないよ。3丁目に河原があるじゃん」

「おー、あるなあ。幼稚園ぐらいの頃、行った事があるわ」

御風が当時を思い出しながら頷いた。

「あの辺りにね、なんと『怪物』が出るそうなんだよ！」

「大丈夫か」

御風は物凄く真剣な様子で級友の頭を心配した。

「ちよっ！？そのマジ顔やめて！俺がホントにやばいみたいじゃん」

「いや、やべえ。マジやべえ」

「ひどっ！でもこの話本当らしいんだよ。襲われて怪我したって人もいるってさ。今じゃ噂のせいであの辺りには誰も近づかないらしいよ」

「ふーん」

「ま、何してんのか知らないけど、あの辺りには近付いちゃだめだよ」

そう言うと、クラスメートはサッカーをしに去って行った。

彼がいる前では、気のない返事をしていた御風だが、内心では少し興奮していた。

その『怪物』の正体に心辺りがあったのだ。

ジュエルシードモンスター。

御風は数日前の黒い異形、そして先日戦った魔犬の姿を思い出す。

その『怪物』が本当にいるのだとしたら、それはジュエルシードの思念体、或いは原住生物を取り込んだジュエルシードの可能性が大いに高い。

「行くしか、ないな」

御風は3丁目の河原に向かって歩き出した。

何者かが縄張りに近づいてくる気配に、『そいつ』はゆっくりとまどろみから覚めた。

それは『そいつ』にとって、狩りの始まりを意味していた。

ここしばらく何物も自分の縄張りに近づく事はなく、『そいつ』は空腹感を覚えていた。

久しぶりの獲物を仕留めるべく、『そいつ』はゆるりと身をくねらせた。

少女はジュエルシードの気配を感じた。

今日は運がいい。つい先程も多少の妨害があったものの、ジュエルシードをひとつ、確保したばかりであった。

これでまた、あの人の願いに　そして自分の望みに近づく事ができる。

そして少女は、その気配に向かって飛翔した。

鮫ともう一人の魔法少女（前編）（後書き）

長くなりそうなので、前編と後編に分けます。

本作品内のあのカップリングに関しては完全に私の趣味です。

いいじゃないか、ユー×なのが好きだつて。

次回はジュエルシードモンスターとの激闘。そして彼女との初遭遇が見所となります。

それでは、また。

鮫ともう一人の魔法少女（後編）（前書き）

お気に入り登録件数がいきなり増えてる……だと……？  
皆様に多大な感謝を。批評や感想もお待ちしております。



## 鮫ともう一人の魔法少女（後編）

「ここか」

都市部を抜け、件の河原までやって来た御風は、まずその人気の無さに驚いた。

（休日を通すにやあ、結構いい場所だと思うんだが、人っ子一人いないとなると、例の噂は相当広まってるみたいだな）

その河原は、緑豊かな何とも心和む場所のはずなのに、人の姿がまるで無いというだけで、何故かずいぶんと気味の悪い場所になっていた。

「こんなに明るい内からつてのがまた怖い」

ぶるっと少し身震いした御風は、意を決してジュエルシードの探索を始めた。

と言っても、御風はユーノの様に探索魔法が使えるわけではないので、風の中にある魔力を感じ取り、そこにある違和感を探すのである。

「……特に、何もねえな」

周囲に際立っておかしな場所はない。目視による探索も行いながら、御風はもしかしてガセだったかも、と拍子抜けしていた。

「！」

その時、御風の感覚が何かをとらえた。風を操るその業故か、あるいは【魔法使い】故か、御風の気配を探る感覚は常人のそれよりもすぐれていた。

その感覚が伝えるのだ。何か、己に敵意を持つ何か近づいてくる事を。

右から？左から？それとも上から？

否。

「下……だとおっ!？」

瞬時に【魔法】を発動させ、翼を展開した御風は空中高く舞い上が

った。

その直後。

「ごばあああんっ！」

今の今まで御風が立っていた場所から、体長4メートルはあろうかという、赤茶けた肌を持つ八つ眼の鮫によく似た怪物が飛び出して来た。

御風を追って空中に躍り上がった『鮫』だが、その牙は惜しくも御風を捉える事無く、ガチリと虚しく宙を噛み、再び地面に大きな波紋を残して沈んで行った。

そして、危うく食われかけた御風は、心臓が飛び出そうな程、その鼓動を荒げていた。

（こ、こ、怖ああああっ！？おいおい、なんだ今の？洒落にならんぞ、あれ！今までよくけが人だけで済んでたな！しかもあいつ地面に潜ってたぞ！？）

そう、『鮫』は地面をあたかも水のように飛沫を上げ、波紋を残し移動していたのである。

「土の中を水の中みたいに動けるってのが、あいつの能力か」  
御風は戦慄と共に呟いた。

ジュエルシードモンスターである『鮫』の能力は、まさにそれであった。自身が触れた部分を水のように変化させ地中を自在に泳ぐ。

そしてその『鮫』と言えば、まだ御風を諦めるつもりが無いのか、『ジョーズ』の様に背びれを地面の上に出し周囲を回遊している。

「陸にいながら漁業をする羽目になるとは思わなかったな」

そして御風も、この危険なジュエルシードモンスターを放置すつもりはない。

羽に込めた魔力をさらに強め、臨戦態勢に移行する。

「まずは、小手調べ！」

御風は組み替えた風を指先に集め、それを一気に振り下ろした。

そこから巨大な風の刃が発生し、地面を泳ぐ『鮫』に突き進む。

「【魔法】エンゼルフェザー、ツェアライセン 大切断！」

だが、飛来する風刃に気付いた『鮫』は、直撃する瞬間地中の奥深くへ潜ってしまった。

『鮫』の能力から離れた地面は、当然風刃の侵入を許さず、御風の魔法は地面に大きな裂傷を付けるだけに終わった。

（土が邪魔で攻撃が当たらねえ。これは、思った以上に厄介だな）  
御風は密かに歯がみした。

空中にいる限り『鮫』の攻撃は御風には当たらない。だが同様に、御風の攻撃も固い土の壁に遮られ、『鮫』まで届かない。

ここに来て、御風の最大とも言える弱点が露呈した。

即ち、攻撃に重さが無いのである。

風的特性上仕方が無い事なのだが、それを御風は手数と技のバリエーションで対応してきた。

だが、ここまで相手の防御が固いとお話にならない。何しろ『鮫』が盾にしているのは、御風達が普段足を付けている、地面そのものであるのだ。

「こんな時になのはが居りゃあな」

今はここに居ない友人の魔法少女を思って、御風は小さく舌打ちした。

もしここになのはがいれば、先日見せた新魔法『デイバインバスター』で地面ごと『鮫』を打ち抜く事が出来たかもしれない（できない、とは言えないような威力が、あの魔法にはあった）。

だが、いない者を頼みにしても仕方がない。手持ちの札と知恵で、御風はこの難敵に立ち向かうしかないのであった。

（ちつとばかり、頭回転させなきゃならねえか）

御風は空中でうんうんと唸り始めた。

『鮫』は上手いかわかない「狩り」に苛立っていた。

人間のくせに何故か飛べるこの獲物は、自分の牙の届かない場所に

陣取り、こちらの様子を窺っているようだ。

向こうの狙いが何かはわからないが、『鮫』にとってはどうでもいい事である。

それよりも、あの生意気な空飛ぶ人間をどう自分のテリトリーに叩き落としてやるうかを考える。

『鮫』はしばしの思考の後、以前に鳥を落として食した時の手法をとる事にした。

「なんだ？」

突如動きを変えた『鮫』に御風は警戒心を強める。

『鮫』はその場でぐるりと回転すると、遠心力によって勢いの増した尾びれを御風に向かって振り上げた。

ざばぁんっ！

巻き上げられた土が飛沫となって御風に散る、と思われたその時、

『鮫』の能力を離れた土は固い弾丸と化し、凄まじい威力を伴って御風に襲い掛かった。

「何いいいいっ!？」

咄嗟に風の障壁を展開するが、構成の甘いそれは直撃を防ぐには至らず、防御壁を破り御風に迫る。

そして運の悪い事に、その内の一発が御風の羽を貫いた。

「まずっ」

再び翼を作ろうとする御風だが、土の飛礫が魔力の集中を容易にさせない。

そうこうする内にバランスを崩した御風は、錐揉みしながら地面に落ちて行った。

「くっ！」

あわや激突、という瞬間、風を集めてクッションにした御風は固い地面に体を叩きつけられずに済んだ。

一瞬安堵しかけた御風だが、自分が相對していた物を思い出し、ハツと顔を上げた。

するとその前方、待つてましたとばかりに『鮫』が突進してくる姿があった。

その距離数メートル。風の障壁を展開しようにも、魔力を練り上げる暇すらない。

さらに念の入った事に、『鮫』は空中に体を躍らせ、御風が空に逃れる事すら許さない。

天馬御風、絶体絶命の危機。

『鮫』の牙が御風を引き裂かんとしたその刹那。

「かかりやがったな、このダボがあつ！！」

獰猛な表情で咆哮した御風が、あらかじめ展開していた魔法を開放する。

「マテリアル・バズル【魔法】エンゼルフェザー、ツヴァング・ヴァイント戒めの風！！」

次の瞬間、無数の気圏が『鮫』の体を取り巻き、幾重にも渡つて拘束した。

驚愕に身を震わせる『鮫』を前に、御風は会心の笑みを見せた。

その笑みを見た『鮫』は、狩られていたのは己であつた事を悟つた。

全ては御風が謀つた事であつた。

己の魔法は相手に届かない。このままでは千日手になりそうな気配を察した御風は、届かないならば、届く距離まで相手に出てきて貰えばいいと、己を「餌」として相手を釣り上げる事を思いついたのである。

そこまで考えた時に起こつたのが、『鮫』の予想外の攻撃であつた。実は御風、この攻撃には本当に驚いていた。風の障壁や翼を破られたのもわざとではない。だが咄嗟に、この状況を利用した御風はいかにも危なげな様子を見せて相手の油断を誘つた。そして、地面に

落ちるふりをしながら、周囲に自分の意思一つで発動する、設置型の魔法を展開しておいたのである。  
果たして『鮫』は何の疑いもなく御風が張った「罨」に引っ掛ったのであった。

「さて、そんなに長く持つようなもんじゃなさそうだし、さっさと始めるか」

空中で御風の魔法から逃れようと、『鮫』が在らん限りに抵抗している。

ギシギシと嫌な音を立てる拘束の魔法に、御風は手早く以前から確かめたかった事を実行した。

「マテリアル・パズル【魔法】エンゼルフェザー！」

羽のオーラを纏った拳を、鮫に向かって叩きつける。打ち込まれた魔力は『鮫』の全身を駆け廻り、取り憑いていたジュエルシードに注がれる。

次の瞬間、『鮫』の体は光の粒になって溶け消え、その後にはびちびちと地面にのたうつ一匹の鮎と、薄い風の膜に包まれたジュエルシードだけが残った。

「おおっ、成功だ！」

その結果に御風がガッツポーズを取る。

御風が以前から試してみたかった事 マテリアル・パズルそれは、自身の【魔法】を封印に使う事は出来ないか、というものであった。

またしても御風の中に眠る謎の知識によるものだが、マテリアル・パズル【魔法】によって組み替えられた魔力は、他者の魔力の影響を受けない、という特性を持つ。

これを利用して、御風はジュエルシードに【魔法】をかける事で、ジュエルシード周辺の魔力を遮断しようとしたのである。

これはなのは達の使う封印魔法と同じ結果を齎した。最も、このま

まにしておくつもりもないので、後でなのはにきちんとした封印を  
してもらつ事になるが、これによって二つの利点が生まれる。

一つはジュエルシード探索において、二手に分かれる事が出来ると  
いうものである。

今まではな的是がなければ封印する事が出来なかつたジュエルシ  
ードも、今回の実験結果により、御風にも封印が可能になつたから  
である。

そしてもう一つは御風の個人的な事情によるものであるのだが、  
「これでもう、砂糖を吐く日々ともおさらばだぜ！」

幼いカツプルのラブ時空に巻き込まれる度に感じていた虚しい気持  
ちを味合わなくても済むと知り、御風は小躍りしたい気分であつた。  
「おっと、忘れる所だつた」

御風は今だ足元でびちびちしている鮎の尾びれを摘まんて持ち上げ  
ると、川に向かつて放してやった。

ぽちゃん、と軽い水音と共に放された鮎は、すぐに身を翻して泳ぎ  
去ってしまった。

「やれやれ」

先程まで暴れ狂っていた巨大鮫とは思えぬその小さな魚影に、御  
風は改めてジュエルシードの厄介さを思い知つた。

「あとはこいつをなのはに渡せば、任務完了つて訳だ」

御風がそう言つてジュエルシードを手におさめた瞬間、

「……！」

何者かの視線を感じた。

御風がぱつとその視線の方向に顔を向けると、樹の上に立つ、人影  
があつた。

ツィテイルに纏めた長い金色の髪。紅玉の如き真紅の瞳。凜とした、  
という形容がぴたりと嵌る、整つた顔立ちの美少女である。

その華奢な体には、黒の薄いレオタードのような衣装と、裏地が赤  
の黒いマントを纏っている。

そしてその手に握られているのは、先端部に金色の宝玉が付いた、

長柄の斧のような形状の杖。

特徴的なその出で立ちに、知らず御風は眩いていた。

「【魔導師】……！」

「そのジュエルシードを渡して下さい」

少女 フェイト・テストロッサは御風に杖を突き付けながら静かに告げた。



鮫ともう一人の魔法少女（後編）（後書き）

フェイトちゃん参戦です。

小説内のジュエルシードの封印に関する下りは、マテパにおいて月丸を倒した時のシャルロックが言っていたのを流用したものです。

さて次の見所は御風VSフェイト。【魔法使い】と【魔導師】、『風』と『雷』が鎗を削ります。勝敗の行方に関しては、また次回。

## 風と雷（前書き）

書き溜めてるわけじゃないので、話を捻りだすのが大変です。  
他の人たちはこんな時、どんなリフレッシュをするのだろう……？

## 風と雷

その光景を見た時、フェイトが覚えたのは驚きだった。

ジュエルシードの気配を感じて急行したその場所で、暴走体らしき怪物が一人の少年と戦っていた。

自分と同じくらいの年頃のその少年は、見た事もない魔法を使っていた。

初めは自分と同じ『魔導師』かと思ったが、少年はデバイスらしき物も使わず、バリアジャケットも纏わず、自分の知る『ミッドチルダ式』の魔法ならば足元に発現するはずの魔法陣も見えず、しかし彼は背中に一對の白い翼を背負い、戦いの場を舞っていた。

（見た事もない【魔法】……。もしかしたら、この世界特有の魔法なのかも）

フェイトはその美しい柳眉を僅かに顰めた。

自分の知識の及ぶ所でない魔法と言うのは、それだけで脅威だ。ましてや、それが自分と同様にジュエルシードを回収している者ならば尚更である。

（でも、負ける訳にはいかない。あの人の願いのためにも。そして私の望みのためにも）

弱気になりそうな己に活を入れ、フェイトは心を奮い立たせる。

そうこうしている内に、件の少年はジュエルシードの封印を終えた様であった。

知らず、フェイトの体が、これから始まるジュエルシードを巡る戦いへの緊張感が強張る。

その気配を感じたのか、少年がこちらに振り返る。その口から言葉が漏れる。

「【魔導師】……！」

フェイトはそれに応えず、己が手にしたインテリジェント・デバイス『バルディッシュ』を少年に突き付けた。

「そのジュエルシードを渡して下さい」

激闘の跡が今だ残る河原。

そこで、二人の子供が対峙している。

【魔法使い】の少年、天馬御風。

【魔導師】の少女、フェイト・テストロッサ。

張り詰めた緊張感が、その場の空気を覆っていた。

「渡してくれって言われて、はいどうぞって代物じゃねえのは、解ってるよな？」

そんな空気を破って口火を切ったのは御風であった。

「……」

フェイトは、応えない。

「それ以前に、何であんたみたいな魔導師がここにいる？あいつが言っていた『時空管理局』とやらじゃないよな？」

「……」

フェイトは、応えない。

「どうしてジュエルシードの事を知ってる？あいつがこれを発掘したのはほんの少し前だって話だし、こいつがここにある事情つても、ここ数日以内の事だ。あいつの身内か、後数人ぐらいしかその事は知らないはずなんだけどな？」

「……」

フェイトは、応えない。

「だんまりかよ。じゃあ、これだけ答えな。……お前は、俺の敵か？」

「……はい」

初めて、フェイトが応えた。

それを聞いた御風は、挑発的な笑みを浮かべた。

「OK、OK。なら、俺もさっきの要求に答えとく。……一昨日来

やがれ」

フェイトはしばし沈黙した後、

「なら、力づくで頂いていきます」

『バルディッシュ』を構えた。

「やってみやがれ！」

背中に『翼』を出した御風が咆えた。

「……………いきます！」

そして、【魔法使い】と【魔導師】の戦いは始まった。

「バルディッシュ！フォトランサー、連弾！」

『フォトランサー・フルオートファイア』

先手を取ったのはフェイト。手にしたデバイスが主の命と魔力を受け、低い男性の声で応える。

金色の宝玉が瞬き、黒い杖の先端から数本の小さな雷槍が御風に向かって放たれた。

「ちっ！」

御風はそれを空中に逃れる事で回避する。

『ブリッツアクション』

その直後、フェイトの姿がかき消える。

危険を感じた御風は、咄嗟に自分の全方位に風の障壁を展開する。ぎゃりいいいっ！

攻撃は背後から来た。

慌てて振り向くと、障壁とかみ合っているのは、鎌のような光の刃を出した先程とは形を変えたフェイトの杖。

『サイズスラッシュ』

「……………はあっ！」

気合いの声と共に光の刃に流される魔力が強化され、フェイトは御風の障壁を切り裂いた。

その刃が迫る瞬間、御風は再び翼をはためかせフェイトから距離を取った。そして同時に御風は己の魔法を行使する。

「ツェアライセン 大切断」！」

振り降ろされた指先から放たれた真空の刃がフェイトに襲い掛かる。

「アークセイバー！」

「アークセイバー」

しかしフェイトも鎌の光刃を射出し、御風の風刃を迎え撃つ。

互いに喰い合った魔法は、二人の間で対消滅する。

それを待たずに、御風はフェイトに向かって羽を打ち震わせて空を疾駆する。

「おらあつ！」

その拳に羽のオーラを纏わせ、フェイトに殴りかかる。フェイトはその拳を翳したバルディッシュの柄で受け止める。

だが、攻撃を防がれたはずの御風はにやりと笑い、

「マテリアル・パスル 【魔法】エンゼルフェザー！」

【魔法】を発動させる。

すると、バルディッシュの柄から白い羽が生え、あらぬ方向に飛び立とうとした。

「なっ!?!」

驚愕に目を見開いたフェイトが、慌ててデバイスを取り直し、そこに魔力を流し込む。内側から流された魔力に抗しえなかった羽はボンと小さな破裂音と共に散り散りに消えた。

「デバイスを取っちまえば、こっちの勝ちだと思っただがな」

不敵な笑みを浮かべる御風。

フェイトは先に感じた自分の予測が正しかった事を知り、眉根を寄せる。

(未知の魔法……。やっぱり、厄介だ)

相手が何をしてくるか分からない。

戦いの場において、情報の有無は時として命の明暗すらも分ける事がある。

解らない、という事は、ただそれだけで脅威となるのだ。

( なら、何かしてくる前に叩く！ )

「バルディツシユ、フォトランサー・マルチショット！」

『イエツサー。フォトランサー・マルチショット』

御風が行動を起こす前にそれを封殺すべく、フェイトは魔法を発動させる。

すると、先の雷槍の倍以上の数が御風に向かって飛ぶ。

「『風の砲撃・連続射出』！」

御風も風の砲弾を大量に生みだし、雷槍の群れと打ち合わせる。

轟音が響き渡り、周囲に空気の焼ける臭いと粉塵が満ちる。

それらが晴れた時、そこには互いに無傷の二人が残っていた。

( ……強い！ )

それが二人に共通した相手の力量に対する感想であった。

( 俺より速い奴と戦うのは初めてだな。空の上で後れを取るたあ思わなかったぜ )

御風がフェイトのスピードに舌を巻けば、

( 一つ一つの動作が鋭い。要所要所でこちらの上を行かれてしまう )  
フェイトが御風の機動性に目を見張る。

共に戦闘スタイルの似た二人は、相手の手強さに内心で感嘆する。

( だが、向こうの防護服はなのはの奴と違って薄そうだ。完全にスピードを重視して作ったんだろうが、逆にそこが弱点。一撃当てりゃあ墜ちる！ )

( 風の魔力変換？あの魔法は厄介だけど、使ってる本人はバリアジヤケットも着てない。一度でもこちらが攻撃を当てたら、勝てる！ )  
それぞれの攻略法を見出した二人は、

( ( 一撃必殺！大技で仕留める！ ) )  
同様の結論に達する。

フェイトが、御風から更に距離を取る。

警戒する御風の目の前で、フェイトは杖を構え、その体から魔力を立ち上らせる。

(あちらさんも同じ腹積もりかよ)

フェイトの意図を察した御風は、それに答えるべく自身も魔力を高め、魔法を構成し始める。

指先を伸ばし、腕を垂直に掲げる。それと同時に風が渦を巻き、御風の腕に集っていく。

かちやかちやと音を立てながら組み替えられて逆巻く風は、徐々にその回転数を上げながら発光し、ついには御風の腕を光の剣の如き威容に変化させる。

御風は腕を引き、ぎゅいっ！と甲高い音を立てて渦巻く魔法を構える。

そして対するフェイトも、魔力を練り上げ自身の魔法を完成させる。溢れ出た魔力が彼女の変換資質『電気』により、ぱりぱりと音を立てて周囲の空気を軽く焦がす。

そして二人は、互いの魔法を開放させる。

「撃ち抜け、轟雷！『サンダースマツシャー』！」

「サンダースマツシャー」

バルディッシュの先端から放たれた金色の砲撃が御風に向かって突き進む。

それに対し御風は、迫りくる砲撃に自ら突っ込みながら、腕の魔法を繰り出す。

メテリアル・バズル

「【魔法】エンゼルフェザー、『大回転衝角』！」

シユヒラーレ・ウム・ドレーエン

それぞれの必殺が激突した。

そして、フェイトの目が驚愕に見開かれる。

「なっ……！？」

御風がフェイトの砲撃を貫きながら、突き進んで来る。

飛び散った砲撃の残滓が御風の体を傷つけていくが、御風はそれでもお構いなしである。

「おおおおおおおっ！！！」

シユヒラーレ・ウム・ドレーエン

咆える御風に応え、『大回転衝角』が更に唸りを上げて回転する。

そして御風は、動きを止めたフェイトの元に到達する。



「ブチ貫けえええっ！」

御風の魔法がフェイトに届かんとしたその時、  
ばぎいいんっ！

フェイトが展開した金色の魔力障壁がそれを阻む。

『サンダースマッシュャー』とのせめぎ合いでその威力を大幅に減少させていた『大回転衝角』シユビラーレ・ウム・ドレーエンはその壁を破る事が出来ず、こちらもそのまま消滅してしまった。

安堵しかけたフェイトだが、今だ不敵な表情を崩さぬ御風に気付いて体を強張らせた。

「こつなる事ぐらひは織り込み済みだ。俺の本命はこつちだ！」

言うなり、逆の拳に練り上げていた魔力を羽のオーラに変換し、御風はフェイトの魔力障壁を粉々に打つ砕いて、その拳を彼女の体に叩き込んだ。

「かはっ！」

苦悶の声を上げるフェイト。だが、まだ致命傷ではない。

再び距離を取ろうとするフェイトだが、御風の【魔法】がそれを許さない。

「エンゼルフェザー！」

フェイトに叩き込まれていた魔力が瞬時に羽に姿を変え、フェイトの動きを拘束する。

「くっ！」

己の体に魔力を流し込み、フェイトは羽を壊そうとした。

しかしそれよりも早く、御風が最後の一手を打つ。

「【魔法】マテリアル・バズルエンゼルフェザー、風よ分解せよ、元に戻れ！」

瞬間、フェイトの体を元に戻された事で圧縮されていた風が叩いた。  
「ああっ！」

文字通り、体の芯から揺さぶられるような衝撃を受けたフェイトは、小さな悲鳴と共に意識を失った。

「ううん……」

小さく呻きながら、フェイトは目覚めた。

そのまましばしボーっとしていたが、自分が置かれていた状況を思い出し、慌てて身を起こそうとした。

「きゃっ!?!」

しかしそれは叶わず、フェイトはまた小さく悲鳴を上げてその場に転がった。

見れば、あの少年の魔法なのか、風の気圏がフェイトの体を幾重にも拘束していた。

(バルディッシュは?)

己の相棒を探すフェイトは、少し離れた所にある樹の根元に立てかけられているバルディッシュを見つけて安堵する。

そして冷静になって辺りを見回したフェイトは、そこが先と変わらぬ河原である事に気付いた。

「よお、目が覚めたか」

掛けられた声の方を向くと、先程まで戦っていた少年　御風が立っていた。

「大した怪我がなくてよかった。まあ実行した本人が何言ってるんだって感じだけど」

御風が申し訳なさそうな顔をする。

「さて、勝者の権限。敗者の責務って奴だ。こちらの質問に答えて貰うぜ」

だが、すぐにその顔を引き締め、警戒心を露わにするフェイトに問うた。

「あんだ、名前は？」

その質問に拍子抜けしたのか、フェイトは思わず答えていた。

「ふえ、フェイト。フェイト・テストロツサ」

「ふーん、フェイトか。きれいな名前だな」

「え。……あ、ありがとう」

またしても思わず礼を言うフェイトに、

(この娘、ちよつと天然だな)

御風はそう思った。

「俺は天馬御風。じゃあ互いの自己紹介が終わった所で、本格的な質問だ」

御風の言葉に、フェイトはぐつと体を固くする。

「まず一つ目。さっきも聞いたが、どうしてジュエルシードの事を知ってる？あいつの話が正しいなら、俺たち以外でジュエルシードの回収者が現れるのはまずあり得ねえ」

フェイトは黙って答えない。

「ふむ……。では二つ目。フェイトはこの町にジュエルシードがばら撒かれる原因になった輸送船の事故とやらに関わってるか？一つか、船を落としたのは、お前、もしくはお前らか？」

フェイトは黙って答えない。

「三つ目。お前の背後に何がいる？」

フェイトは黙って答えない。

「俺は時空管理局を知らないけど、時空を股にかけて活動してるって話が本当なら、それは相当でかい組織のはずだ。そんな組織に喧嘩売るような真似を、フェイト一人でできたとは思えねえ」

フェイトは黙って答えない。

「それは組織か」

フェイトは黙って答えない。

「それは個人か」

フェイトの体が僅かに揺れる。

「それはフェイトの身内 父親か母親か？」

フェイトの体はつきりと強張った。

「……なるほどな。フェイトが正直者だつて事はよくわかった」  
「違う！」

それまで黙っていたフェイトが突如叫んだ。

「わ、私一人でやってるの！だ、誰も、誰も関係無いの！」

「いや、喋れば喋るほど墓穴掘ってるって事、気付いてるか？」  
御風の言葉に、フェイトはしゅんとして頂垂れた。

「さて、悪いけどこのまま仲間の所まで連れてくぜ。色々詳しい事を聞かなきゃならんからな」

そう言つてフェイトの体に翼を生やそうとした時、御風の鋭敏な感覚が、こちらに向かつてくる何かを捉えた。

慌ててそちらに顔を向けると、凄まじいスピードで駆けてくる女の姿が映った。

「おおらあつ！」

女は瞬時に御風の間合いを浸食すると、振りかぶった拳を叩きつけてきた。

瞬時に風の障壁を展開した御風だが、女の力は予想以上に強く、御風は障壁ごと吹き飛ばされてしまった。

「新手か!？」

吹き飛ばされながら態勢を整えた御風は、危なげなく着地すると同時に新たな闖入者を見る。

18〜19歳ぐらい、ちょうど大学生程度の年齢だろうか。オレンジの長い髪を持った、活発な印象を受ける美女である。

だが、何よりも特徴的なのが、

「……………犬耳？」

その頭から生えた犬の耳と、腰のあたりから生えた尻尾である。

「コスプレって訳じゃなさそうだな」

その耳や尻尾が細かく動くのを見て、御風は目の前の女が尋常な存在でない事を知る。

「大丈夫かい、フェイト!？」

「アルフ……。うん、私は大丈夫だよ」

アルフと呼ばれた女が、力任せにフェイトに掛けられていた魔法を引き千切りながら、心配そうに声をかける。

「それならいいけど……。あ、あとこれ」

アルフはいつの間にか回収していたバルディッシュをフェイトに手

渡した。

「ありがとう」

バルディッシュを受け取ったフェイトは、御風に向き直る。アルフもまた、それに並ぶ。その顔は今にも飛びかかって行きそうな程険しい物であった。

「よくもうちのご主人サマにひどい事してくれたね！子供だからって、容赦しないよ！」

「さっきのパンチで十分承知してるよ」

怒るアルフに、御風はげんなりとした表情を見せる。しかし、すぐに状況を分析すべく頭を回転させる。

（状況ははつきり言ってこっちが相当振不利。さすがに二連戦はきつい上に、向こうには無傷の新手が一人だ）

自分とフェイトだけなら条件は一緒なのだが、アルフの存在がその天秤を大きく狂わせる。

このまま戦えば、再び勝つ事は難しい。ましてや、こちらはジュエルシードを守らねばならないのだ。

（なら、取るべき手段は一つ、だな）

御風はこれからの行動を決めると、フェイトに話しかけた。

「保護者が来たみたいだから、お前の身柄は返しとく。気を付けて帰れよ、フェイト」

「あ、うん。ありがとう、えっと、ミカゼ？」

律義に返してくるフェイトに、やっぱり天然だなと思いつつ、御風は密かに構成していた魔法を解き放つ（因みにアルフは「気安くフェイトの名前を呼ぶんじゃないよ！」とまた怒っていた）。

「メテリアル・パスル【魔法】エンゼルフェザー、ウィルヘル・ウイント『つむじ風』」

開かれた御風の手の上で、風が僅かに渦を巻く。それはみるみる勢いを増し、あつという間に周囲の砂を巻き上げ、フェイト達の視界をふさいだ。

「わっぷ！？」

「くっ」

顔を腕で覆って、それに耐えるフェイトとアルフだが、数秒後、風が収まった後に御風の姿を発見する事は出来なかった。

「くそー！逃げられた！」

アルフは主人の借りを返せなかったのは悔しいのか、その場で地団太を踏む。

フェイトにしても、まんまとジュエルシードを持ち帰られてしまい、その内心は忸怩たる思いだ。

「それにしても、何だいあいつの魔法は？あんな変な魔法、見た事無いよ」

「うん。たぶん、この世界独自の魔法何だと思う。何でそんな人がジュエルシードを集めてるかは知らないけど、ジュエルシードの発掘者を知ってるみたいだったから、現地で見つけた協力者かもしれない」

「厄介だね。まさか、真つ向勝負でフェイトを負かしちまうとは。

……ま、次戦えば、フェイトが勝つだろうけどね！」

アルフの言葉に、フェイトは力強く頷いた。

「うん、今度は負けない」

そう、次は負けられない。負ける訳にはいかない。自分を待つてくれている母のため、そして自分自身の望みのために、絶対に負けられない。

決意を新たにしたフェイトの脳裏に、今日戦った、もう一人の魔導師の姿が浮かんだ。

自分と同じくらいの女の子。対話でこちらとコンタクトを取ろうとしてくれていたのに、問答無用で落としてしまった。

（悪い事、したな。でも、ジュエルシードを回収しようとしてたから、あの子もミカゼの仲間なのかもしれない）

フェイトは、立ち塞がるであろう二人の障害に、暗澹たる思いにな

つ  
た。

## 風と雷（後書き）

御風WIN！

辛うじて御風がフェイトに勝利しました。

さて、次回は温泉回。なぜか連れて来られた御風は、戦闘民族高町家と、彼らを取り巻く濃ゆい面子に圧倒される事になります。

そしてその夜、御風は再び雷を纏う魔導師の少女と邂逅します（もちろんなのはも）。

それでは、また次回。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7510x/>

---

風の魔法使い

2011年10月29日05時06分発行